ISSN 0289−4130

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

絡条体圧痕文の付く野島式土器　金子直行
−早期後葉における絡条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について−

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味　細田　勝

加曽利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係　上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（I）　小野美代子

荒川流域出土の大廓式土器について　栗岡　潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡　福田　聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について　瀧瀬芳之
−埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）−

国界地域の土器流通　赤熊浩一
−下総国と武蔵国の様相−

地震で沈んだ倉と古代の集落　田中広明

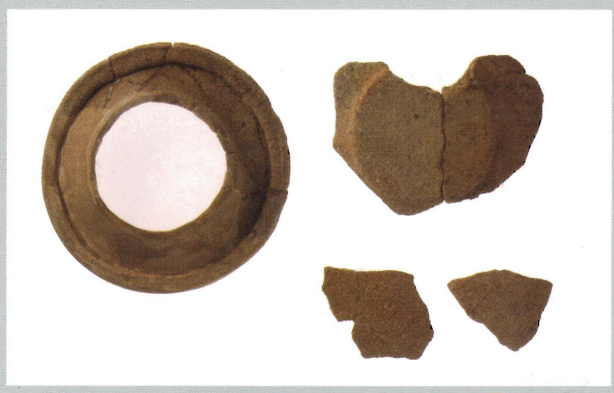
2011

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

口絵 1

1　白井沼遺跡出土大廓式土器

2　大型壺口縁部（白井沼）



3　複合口縁壺（白井沼）

4　鍛冶屋・新田口遺跡（非掲載）

5　大型壺口縁部（川合遺跡）

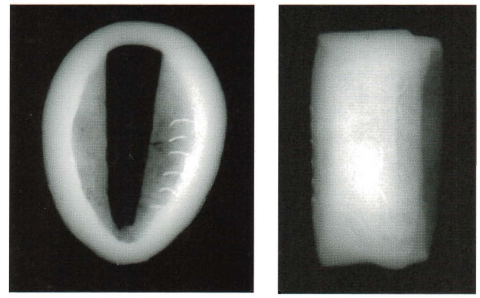
6　大型壺口縁部（川合遺跡）

7　大型壺口縁部（川合遺跡）

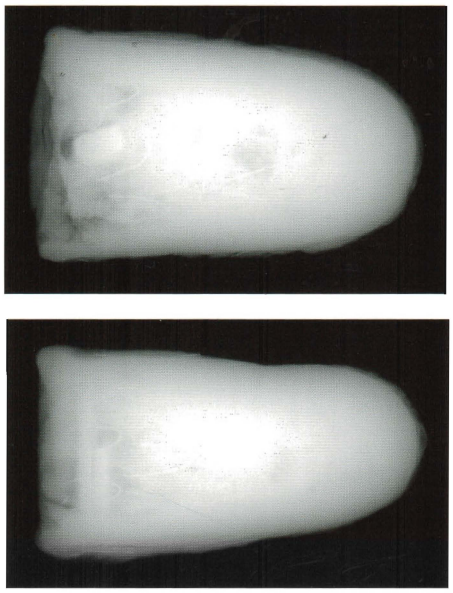
8　大型壺口縁部（川合遺跡）

瀧瀬論文　X線透過写真

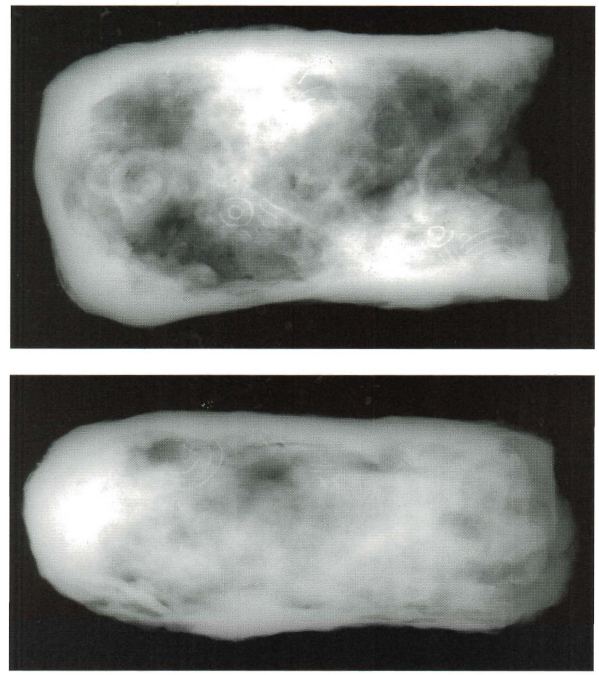
SPM88-041-12



SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64

加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

要旨　中期後葉の土器である加曽利Ｅ式土器が、後期初頭まで継続することは以前から指摘されていた。近年、埼玉県をはじめ各県において加曽利Ｅ式土器と後期初頭の称名寺式土器が共伴して出土する事例が増加してきている。そこで、遺構一括資料を対象とし、称名寺式土器との関係も含めて、加曽利Ｅ式土器の終焉について検討を行った。その結果、称名寺式第３段階において、型式としての加曽利Ｅ式は終焉を迎えているという結論を導き出すに到った。

１．はじめに

筆者は、平成21年度に称名寺Ⅱ式土器について整理する機会があった（西井2010）。その後、称名寺Ⅱ式土器の様相について検討を行った（上野2010）が、その際、称名寺式期の資料の中には、加曽利Ｅ式系土器の伴出例があり、そのうちには称名寺式土器の後半段階にまで及ぶ事例も確認された。筆者は、かつて加曽利ＥⅣ式段階を、称名寺式土器Ｉａ段階に並行するとしたことがある（上野1999）。しかしながら、それは遺跡から出土した加曽利ＥⅣ式土器を考察したものであって、加曽利Ｅ式土器の終焉を検討したものではなかった。従って今回は、加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器の関係について、遺構一括資料を基に検討したい。

２．加曽利ＥⅣ式土器について

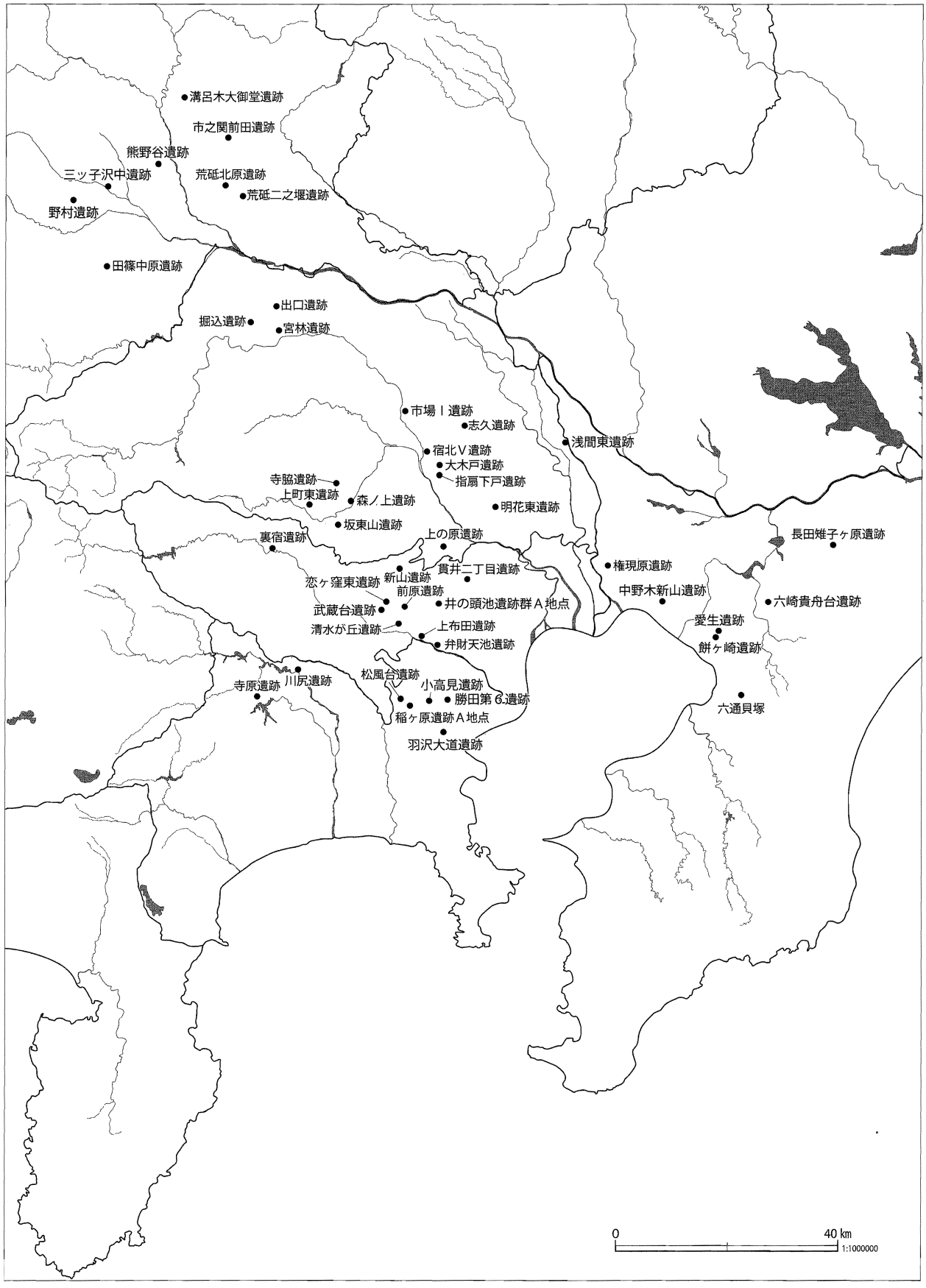
従来の分類からすれば、加曽利Ｅ式土器の終末に相当するのは、加曽利ＥⅣ式土器である。その加曽利ＥⅣ式土器については、筆者は前述のとおり称名寺Ｉａ段階に並行するとした。しかしながら、金子直行氏は加曽利ＥⅣ式には称名寺式を伴わない古い段階と、称名寺式を伴う新しい段階があるとの見解を示している（金子2004）。また、2007年に行われた『第20回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』において鈴木徳雄氏は、後期段階の加曽利Ｅ式土器については、加曽利ＥＶ式と称することを提案している（鈴木2007）。細田勝氏は、中期終末に位置付けられるものを加曽利ＥⅣ式古段階、後期初頭に並行するものを加曽利ＥⅣ式新段階と捉えている（細田2008）。

以上を踏まえ、今回対象とする資料だが、上記の加曽利ＥⅣ式段階とされる土器群のうち、吉井城山類の文様が上下に分離したもので、下の文様が逆Ｖ字状となる土器の出現以降のものを対象とした。

土器群の類型については、「関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器」（谷井・細田1995）の類型に倣った。

３．称名寺式土器について

称名寺式土器の区分については、2007年の第20回縄文セミナーにおける、鈴木氏の分類に準じることとした（鈴木2007）。称名寺式土器を７段階に分類するもので、第１段階をＩａ式、第２段階をＩｂ式（古い部分）、第３段階をＩｂ式（新しい部分）、第４段階をＩｃ式（古い部分）、第５段階をＩｃ式（新しい部分）、第６段階をⅡ式（古い部分）、第７段階をⅡ式（新しい部分）とした。そして、第１から３段階を古い部分、第４・５段階を中位の部分、第６・７段階を新しい部分としたものである。


溝呂木大御堂遺跡
市之関前田遺跡
熊野谷遺跡
三ッ子沢中遺跡
荒砥北原遺跡
荒砥二之堰遺跡
野村遺跡
田篠中原遺跡
出口遺跡
掘込遺跡
宮林遺跡
市場Ⅰ遺跡
志久遺跡
浅間東遺跡
宿北Ⅴ遺跡
大木戸遺跡
指扇下戸遺跡
寺脇遺跡
上町東遺跡
森ノ上遺跡
明花東遺跡
坂東山遺跡
裏宿遺跡
上の原遺跡
長田雉子ヶ原遺跡
権現原遺跡
貫井二丁目遺跡
新山遺跡
恋ヶ窪東遺跡
前原遺跡
中野木新山遺跡
六崎貴舟台遺跡
武蔵台遺跡
井の頭池遺跡群Ａ地点
愛生遺跡
清水が丘遺跡
上布田遺跡
弁財天池遺跡
餅ヶ崎遺跡
松風台遺跡
寺原遺跡
川尻遺跡
小高見遺跡
勝田第６遺跡
稲ヶ原遺跡Ａ地点
六通貝塚
羽沢大道遺跡
0
40 km
1:1000000

第１図　遺跡位置図

4．各地域の土器群

2，3項を前提に、地域ごとに、加曽利E系土器のみが出土する遺構、加曽利E式と古い部分の称名寺式土器が共伴して出土する遺構、加曽利E式と中位や、新しい部分の称名寺式土器が共伴して出土する遺構に分けて資料を作成した。対象としたのは、現在の都県それぞれの地域で、神奈川県、東京都、千葉県、埼玉県、群馬県である。第1図は、今回分類した各遺跡の位置図である。

（1）神奈川県（第2・3・16図）

称名寺式土器を伴わない加曽利E式主体の遺構（第2図）

横浜市小高見遺跡J9号住居址（第2図1～13）（山田2005）

住居跡の形状は柄鏡形である。柄部は幅が狭く細長いもので、古い様相を持っている。12・13は埋甕である。1は胴部の破片で、上下に分離した文様の先端部分は鋸歯状となっている。2の上部文様は、玉抱文または、蟹鋏状となると考えられる。沈線文系の土器が主体を占め、微隆起線文系の土器は破片のみが出土している。

横浜市羽沢大道遺跡10号住居址（第2図14～21）（相原他1993）

住居跡の形状は柄鏡形で、張り出し部は隅丸長方形である。15は柄鏡部先端の埋甕で、16は主体部出入り口部の埋甕である。14は小型の台付深鉢形土器である。上下に分離した上部分の文様は、口縁部側で口縁直下を巡る沈線に接し、U字状文が独立して施文されている。17は微隆起線文系の、大型の深鉢形土器である。18は両耳壺である。

津久井町寺原遺跡4号住居址（第2図22～29）（高橋他1997）

住居跡の形状は柄鏡形で、敷石が一部残存している敷石住居である。22は、床面から潰れた状態で出土したものである。胴部の括れは緩やかで、上下の文様の間隔は空いている。文様は8単位施されている。24・28は微隆起線文系の深鉢形土器の破片である。

城山町川尻遺跡ⅡJ2号敷石住居址（第2図30～35）（加藤他2000）

住居跡の形状は柄鏡形で、全面に敷石が認められる敷石住居である。35は埋甕として埋設された両耳壺である。30は沈線によって文様が粗く施文されている。残存する文様の先端は鋸歯状となっている。32は微隆起線文を直線的に垂下させる微隆起線文系の土器である。

加曽利E式土器と古い部分の称名寺式土器が共伴する遺構（第3図）

横浜市稲ヶ原遺跡A地点B－4号住居址（第3図1～16）（平子他1992）

住居跡の形状は柄鏡形である。床面に礫を敷く敷石住居である。図示した土器以外にも多量の第1段階の称名寺式土器が出土しており、称名寺式主体の住居跡である。1～5は加曽利E式土器で、1の壺形土器には沈線で鋸歯状の文様が施文されている。4は岩坪類の深鉢形土器である。

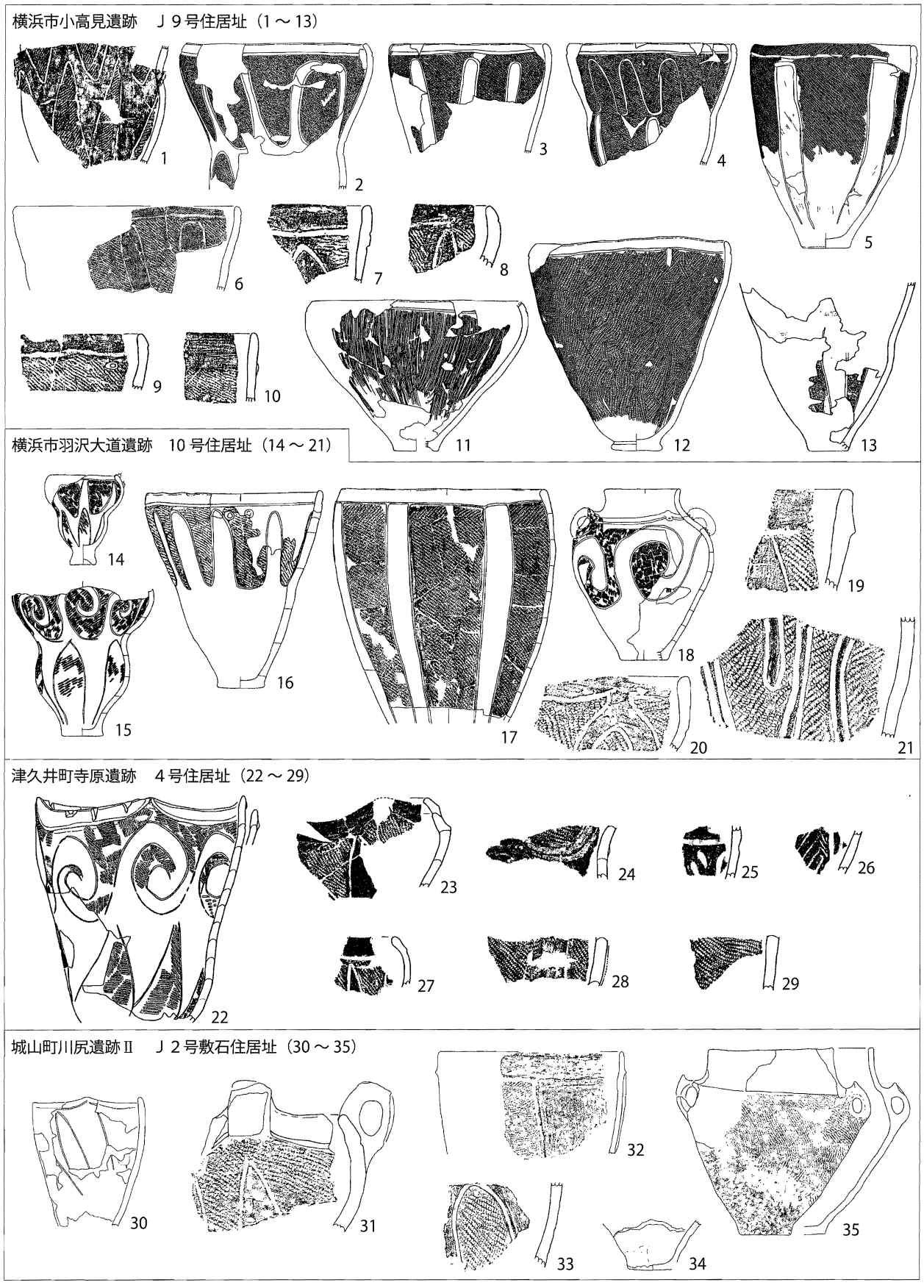
横浜市松風台遺跡JT－3住居跡（第3図17～28）（渡辺1990）

住居跡の形状は柄鏡形で、壁際と張出し部に石が敷かれる敷石住居である。第1段階の称名寺式土器が主体の住居跡で、加曽利E式土器は17などにみられるように、破片のみが出土している。

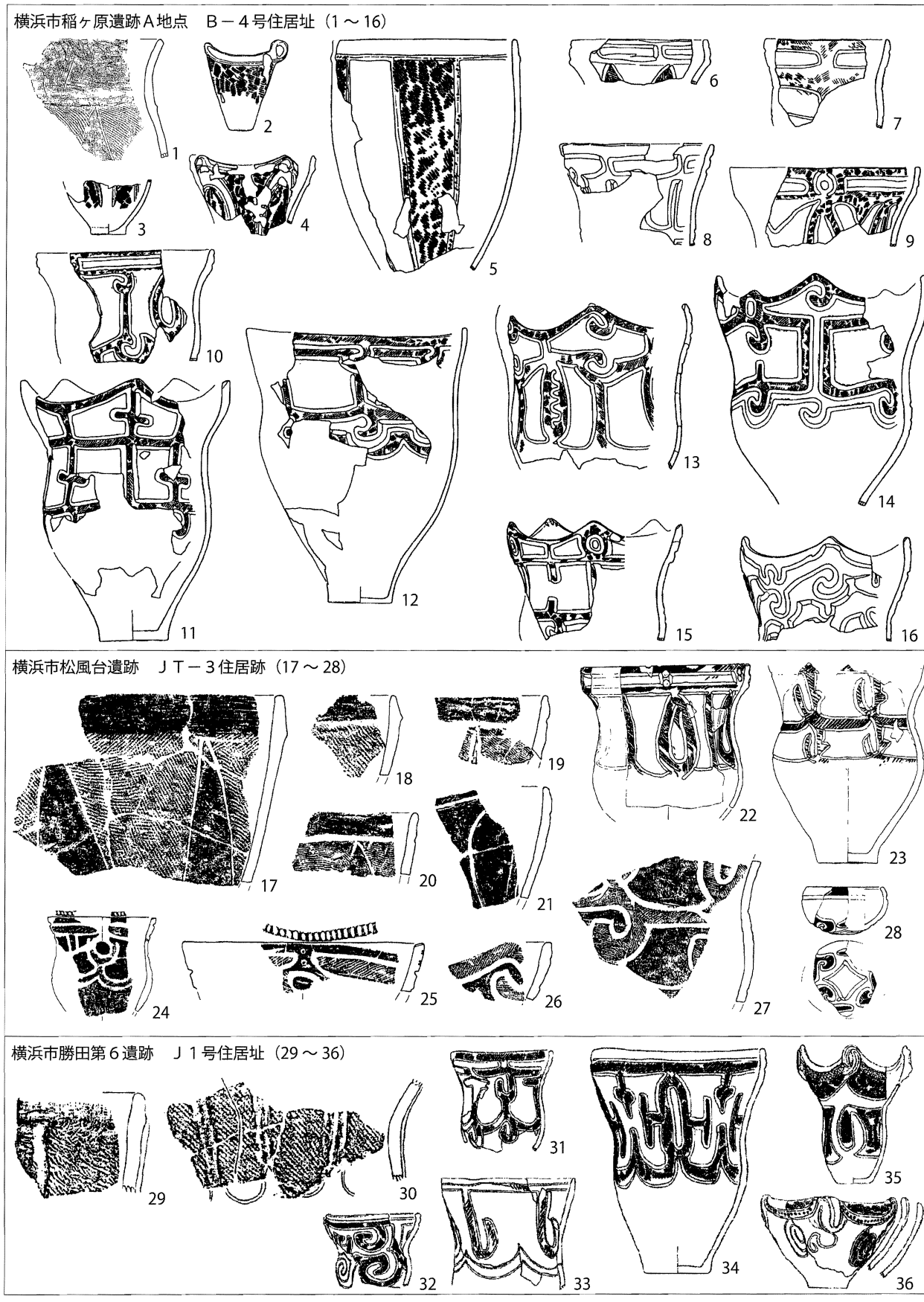
横浜市勝田第6遺跡J1号住居址（第3図29～36）（今井1990）

住居跡の形状は柄鏡形で、一部敷石が残存する敷石住居である。第2段階の称名寺式土器が主体の住居跡で、加曽利E式土器は29・30に見られるように、微隆起線文系の土器片が出土している。34は埋甕である。

加曽利E式土器と中位の称名寺式土器が共伴する遺構（第16図）



第２図　神奈川県出土の中期末から後期初頭の土器群



第３図　神奈川県出土の後期初頭の土器群

横浜市羽沢大道遺跡３号住居址（第16図１～８）（相原他1993）

住居跡の形状は柄鏡形である。第４段階の称名寺式土器主体の住居跡である。１は加曽利Ｅ系の微隆起線文系土器で、胴部にはＸ字状の文様が施文されている。

（２）東京都（第４・５・６・16図）

称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式主体の遺構（第４・５図）

三鷹市井の頭池遺跡群Ａ地点第１号住居跡（第４図１～６）（山村1980）

住居跡の半分が検出されており、全体の形状は不明である。１は口縁部に把手が貼付される土器である。２は微隆起線文系土器である。

東久留米市新山遺跡第21号住居跡（第４図７～15）（井口他1981）

住居跡の形状は柄鏡形である。７は沈線文系の土器で、上部の文様の先端が渦巻くＪ字文と、Ｖ字状の文様を交互に施文している。13は岩坪類の土器片である。

東久留米市新山遺跡第22号住居跡（第４図16～21）（井口他1981）

住居跡の形状は柄鏡形である。一部に敷石が残存する敷石住居である。16は沈線文系土器で、単位文化した上部文様の間隔が広くなる。胴下半の文様は粗雑となり、地文も充填されていない。

小金井市前原遺跡４号住居址（第４図22～31）（小田他1976）

住居跡の形状は柄鏡形である。沈線文系土器は、上部の文様が単位文化し、23・25など文様間には間隔が空いている。24は先端が渦巻くＪ字状の文様が胴上部に施文されるが、胴下部には文様は施文されていない。

府中市武蔵台遺跡Ａ99－ＳＩ１（第５図１～12）（伊藤他2010）

住居跡の形状は柄鏡形である。主体部に石が敷かれる敷石住居である。１は埋甕である。口縁部には把手を対向して貼付している。大きく開く口縁からわずかに胴部で括れる器形である。沈線による逆Ｖ字状の文様は、胴上部のみで下部に文様は施されていない。

狛江市弁財天池遺跡Ｊ３ａ号住居址（第５図13～24）（對比地　他1992）

住居跡の形状は柄鏡形である。主体部に石が敷かれる敷石住居である。16は柄部の先端に埋設された土器である。13・14など、沈線文は逆Ｖ字状に施文されている。19は岩坪類の微隆起線文系土器である。

加曽利Ｅ式土器と古い部分の称名寺式土器が共伴する遺構（第６図）

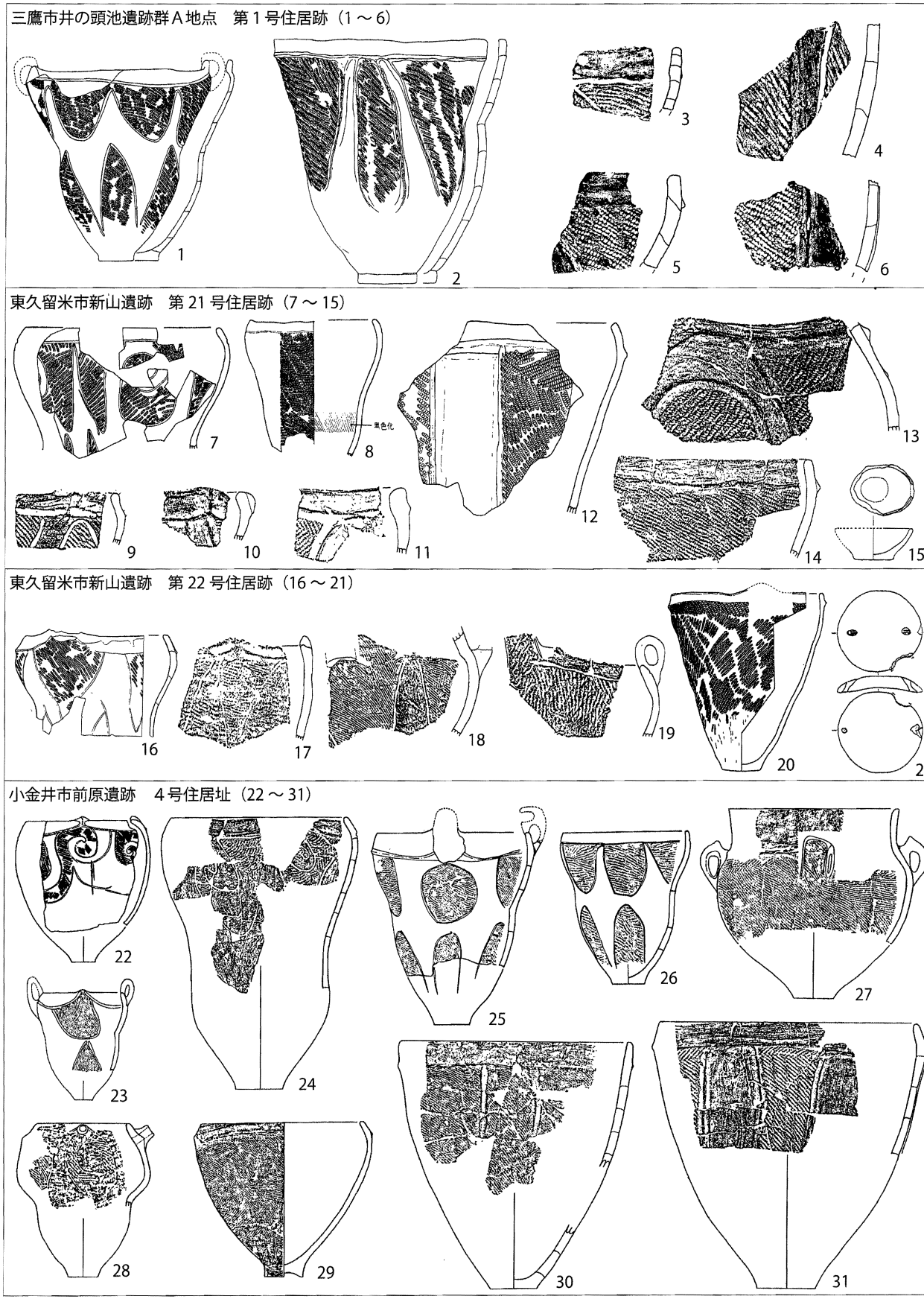
青梅市裏宿遺跡９号住居跡（第６図１～12）（久保田1985）

住居跡の形状は柄鏡形で、主体部と柄部の一部に敷石が残存する敷石住居である。８は埋甕に使用された注口土器である。６～９、11の第１段階の称名寺式と１～５などの加曽利Ｅ式土器が共伴している。加曽利Ｅ系の土器は微隆起線文系土器が多く出土している。埋甕以外はほとんどが破片資料であり、報告書を見る限り、加曽利Ｅ系と称名寺系の出土量に大きな差は見られない。

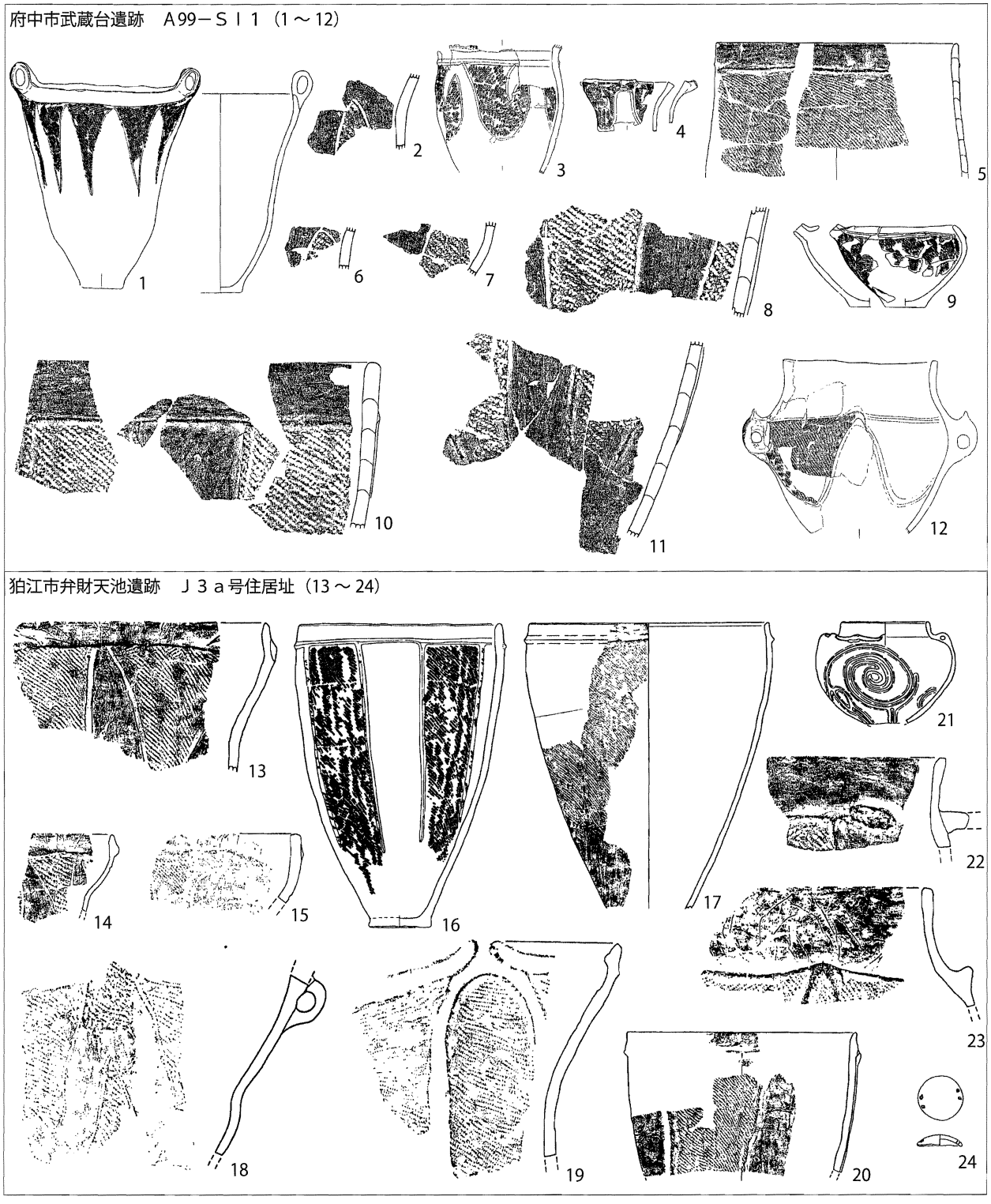
国分寺市恋ヶ窪東遺跡ＳＩ19Ｊ住居（第６図13～21）（上敷領2003）

住居跡の形状は柄鏡形で、主体部と柄部に敷石が残存する敷石住居である。17は柄部の先端の埋甕、19は主体部の出入り口部の埋甕である。17・18・20・21などの第１段階の称名寺式土器と、13・14・16などの、加曽利Ｅ式土器が共伴して出土している。13・14は沈線文系土器で、14の胴下半に文様は施されていない。加曽利Ｅ系と称名寺系の土器量に大きな差は認められない。

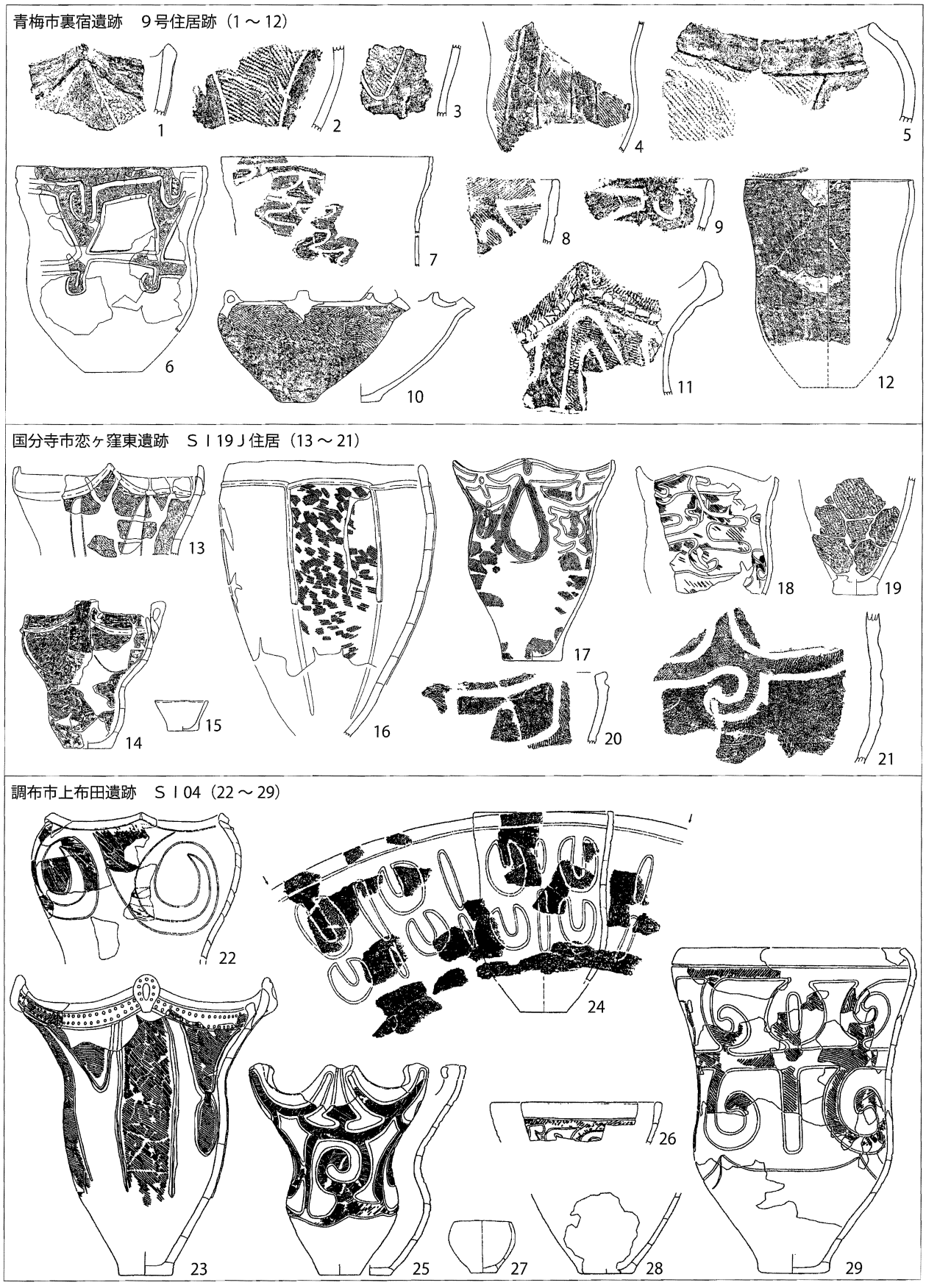
調布市上布田遺跡ＳＩ04（第６図22～29）（赤城1992）



第４図　東京都出土の中期末から後期初頭の土器群（１）



第５図　東京都出土の中期末から後期初頭の土器群（２）



第6図　東京都出土の後期初頭の土器群

住居跡の形状は柄鏡形である。主体部と柄部に敷石が残存する敷石住居である。加曽利Ｅ式土器の23は柄部先端の埋甕、称名寺式土器の25は主体部の出入り口部の埋甕である。24～26、29などの第３段階の称名寺式土器が主体を占めている。加曽利Ｅ式土器である22の沈線文系土器は、胴上部の単位文が独立化、大型化している。微隆起線文系土器の23の文様の単位間も、間隔を空けて施文している。加曽利Ｅ式土器は、微隆起線文系土器が多く出土している。

加曽利Ｅ式土器と中位の称名寺式土器が共伴する遺構（第16図）

練馬区貫井二丁目遺跡Ｊ２号住居址（第16図９～18）（富樫1985）

住居跡の形状は柄鏡形である。北壁に土器と礫が並列して貼り付けられて検出されている。13～17などの第４段階の称名寺式土器が主体を占める住居である。９は加曽利Ｅ系土器で、微隆起線文によってＸ字状に文様を施している。

府中市清水が丘遺跡第４号住居址（第16図19～26）（早川1985）

住居跡の形状は柄鏡形である。第５段階の称名寺式土器が主体に出土し、加曽利Ｅ系の土器の出土量は少ない。19は加曽利Ｅ系の土器で、微隆起線文によって、Ｘ字文を施文し、口縁部文様との接点には、こぶ状の突起を貼付している。第16図９と比較すると単位文が大型化している。

（３）千葉県（第７・８図）

称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式主体の遺構（第７図）

千葉市餅ヶ崎遺跡第４次調査住居址（第７図１・２）（横田1983）

住居跡の形状は柄鏡形である。１は主体部の出入口部、２は柄部の先端から検出された埋甕である。１は微隆起線文系土器で、２の土器と縄文の充填部が反転している。無文となったＵ字文内に、玉抱文を施文している。２は沈線文系土器で、Ｕ字文間に玉抱文を施文している。

船橋市中野木新山遺跡２号住居跡（第７図３～５）（下津谷他1977）

３は沈線文系土器で、胴上部の波状文の頂点は、口縁部区画に接する部分と接しない部分がある。４・５は、地文のみが施文される深鉢である。

成田市長田雉子ヶ原遺跡089号土坑（第７図６～12）（喜多1989）

土坑の平面形状は円形で、遺物は上層部分から集中して出土した。沈線文系土器の６は、口縁部を区画する沈線文が、口縁の小突起部で波長部に向けて施文される。胴上部の文様の先端は渦巻き状となり、６単位が施文される。７は岩坪類の微隆起線文系土器である。

佐倉市六崎貴舟台遺跡31号土坑（第７図13～24）（中山2002）

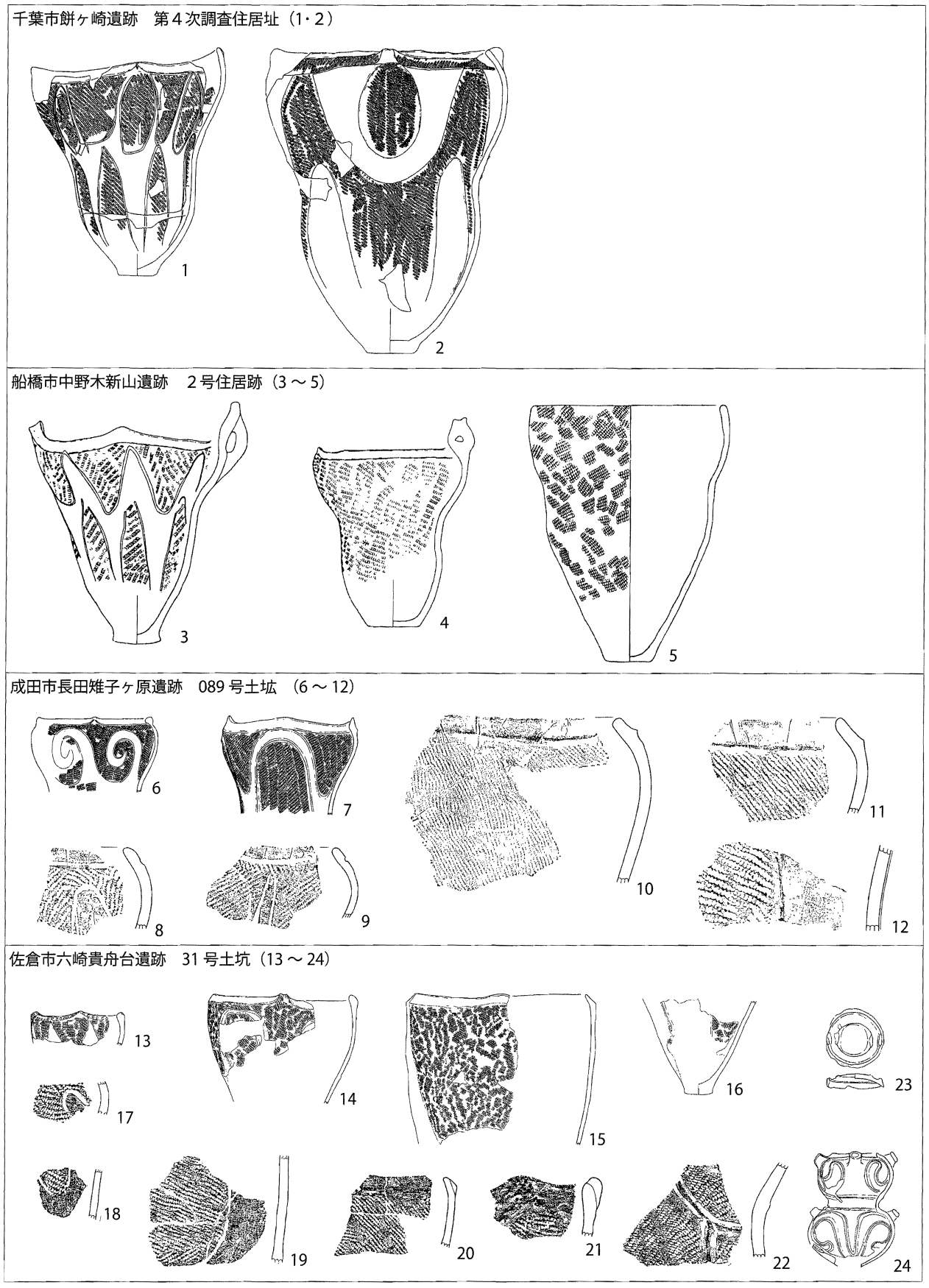
土坑の形状は不定形である。13は口縁部に刺突文が施文される。14は岩坪類の微隆起線文系土器である。22は梶山類の微隆起線文系土器と考えられる。

加曽利Ｅ式土器と古い部分の称名寺式土器が共伴する遺構（第８図）

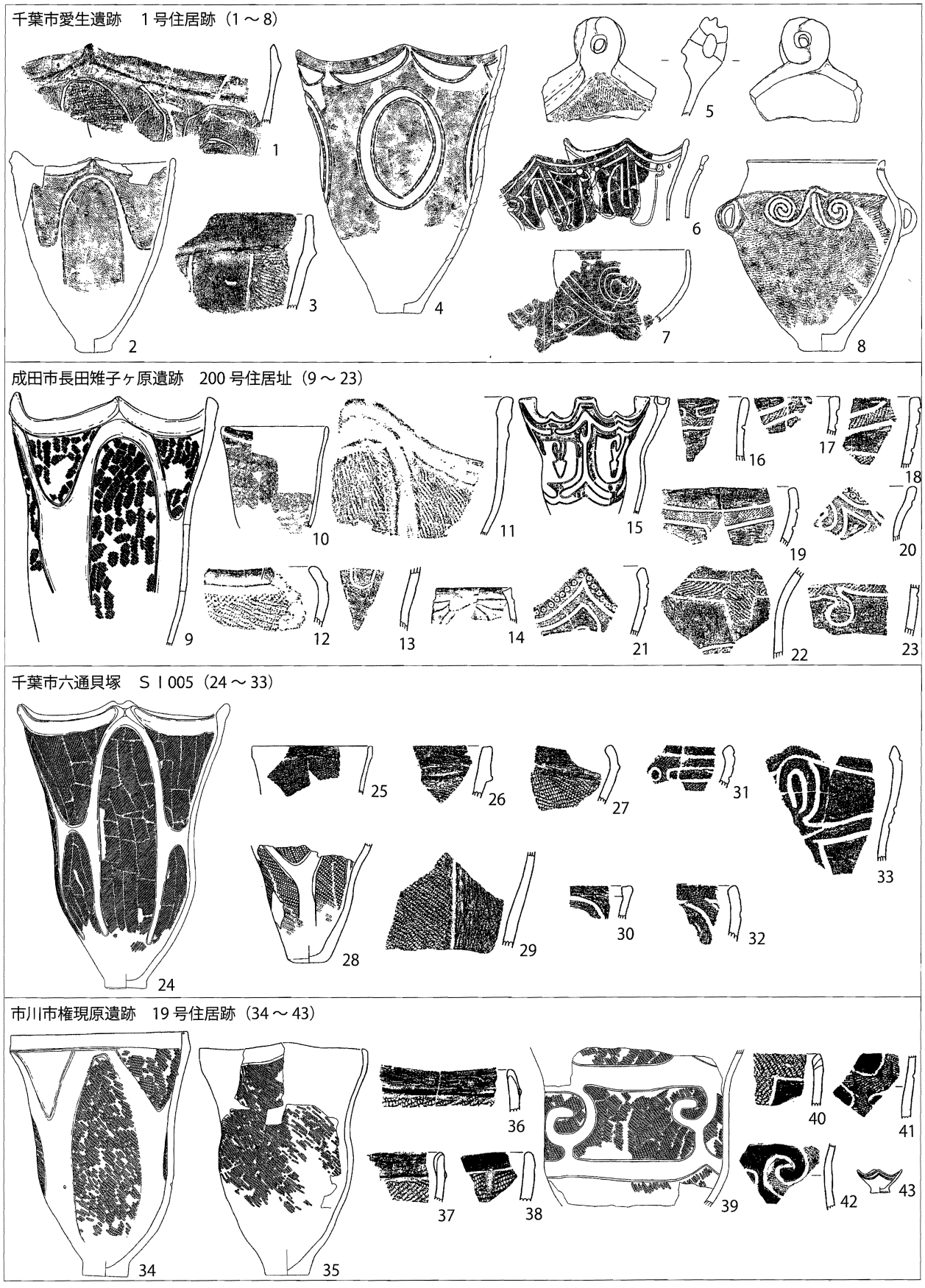
千葉市愛生遺跡１号住居跡（第８図１～８）（長原2000）

住居跡の形状は柄鏡形である。２は主体部の出入口部、８は柄部先端の埋甕である。６の第２段階の称名寺式土器が共伴する。１・３は沈線文系土器で、２・４・８は微隆起線文系土器である。そのうち２は岩坪類である。４は区画文の内側が無文で、外側全てに地文が施文される。出土した称名寺式土器は破片で、加曽利Ｅ式土器主体の住居跡である。

成田市長田雉子ヶ原遺跡200号住居址（第８図９～23）（喜多1989）



第７図　千葉県出土の中期末から後期初頭の土器群



第8図　千葉県出土の後期初頭の土器群

住居跡の全体の形状は不明である。13、15～23などの第２段階の称名寺式土器が共伴する。加曽利Ｅ式土器は９の岩坪類など、微隆起線文系土器が主体を占める。加曽利Ｅ式土器と称名寺式土器の出土量に大きな差は認められない。

千葉市六通貝塚SI005（第８図24～33）（西野2007）

住居跡の形状は柄鏡形である。30～33などの第２段階の称名寺式土器が共伴する。24は埋甕で、微隆起線文系の深鉢形土器である。対向するU字文間は接近している。28・29は、沈線文系土器である。

市川市権現原遺跡19号住居跡（第８図34～43）（花輪1987）

住居跡の形状は柄鏡形である。39～43などの第３段階の称名寺式土器が共伴する。34・35・39は柄部の埋甕で、35・39は入れ子状に埋設されていた。34は岩坪類の微隆起線文系土器で、上部の単位文はV字状となっている。加曽利Ｅ式土器は、微隆起線文系土器が主体を占める。土器の出土量は少なく、加曽利Ｅ式と称名寺式の出土量の差は不明である。

（４）埼玉県（第９～13・17図）

称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式主体の遺構（第９・10図）

寄居町堀込遺跡第111号土坑（第９図１～11）（礒崎他2006）

土坑の形状は不整楕円形である。１～４は沈線文系土器である。２・３は胴上部の文様が波状で、単位文化されていない。２は胴下半には文様が施文されない。１・４は先端が渦巻くＪ字状の単位文が施文される。５は梶山類の微隆起線文系土器である。沈線文系土器が、主体を占めている。

松伏町浅間東遺跡１号土壙（第９図12～21）（金子2004）

１号土壙は１ａ土壙と１ｂ土壙の重複で、遺物は主体的に１ｂ土壙から出土している。12・13は沈線文系土器で、12は胴上部の文様が単位文化している。14・15・17は微隆起線文系土器である。17は胴上部の文様が、蟹鋏状に施文される。

深谷市出口遺跡４号住居址（第９図22～28）（笹森1977）

住居跡の形状は不整楕円形である。22は鉢形の沈線文系土器で、吉井城山類の上部文様が施文される。文様はV字状で、口縁部を区画する沈線に連結している。

深谷市出口遺跡２号住居址（第９図29～36）（笹森1977）

住居跡の形状は不整形である。29は埋甕に使用された沈線文系土器で、胴上部の文様は単位文化されている。

さいたま市指扇下戸遺跡第４号住居跡（第10図１～８）（山口1992）

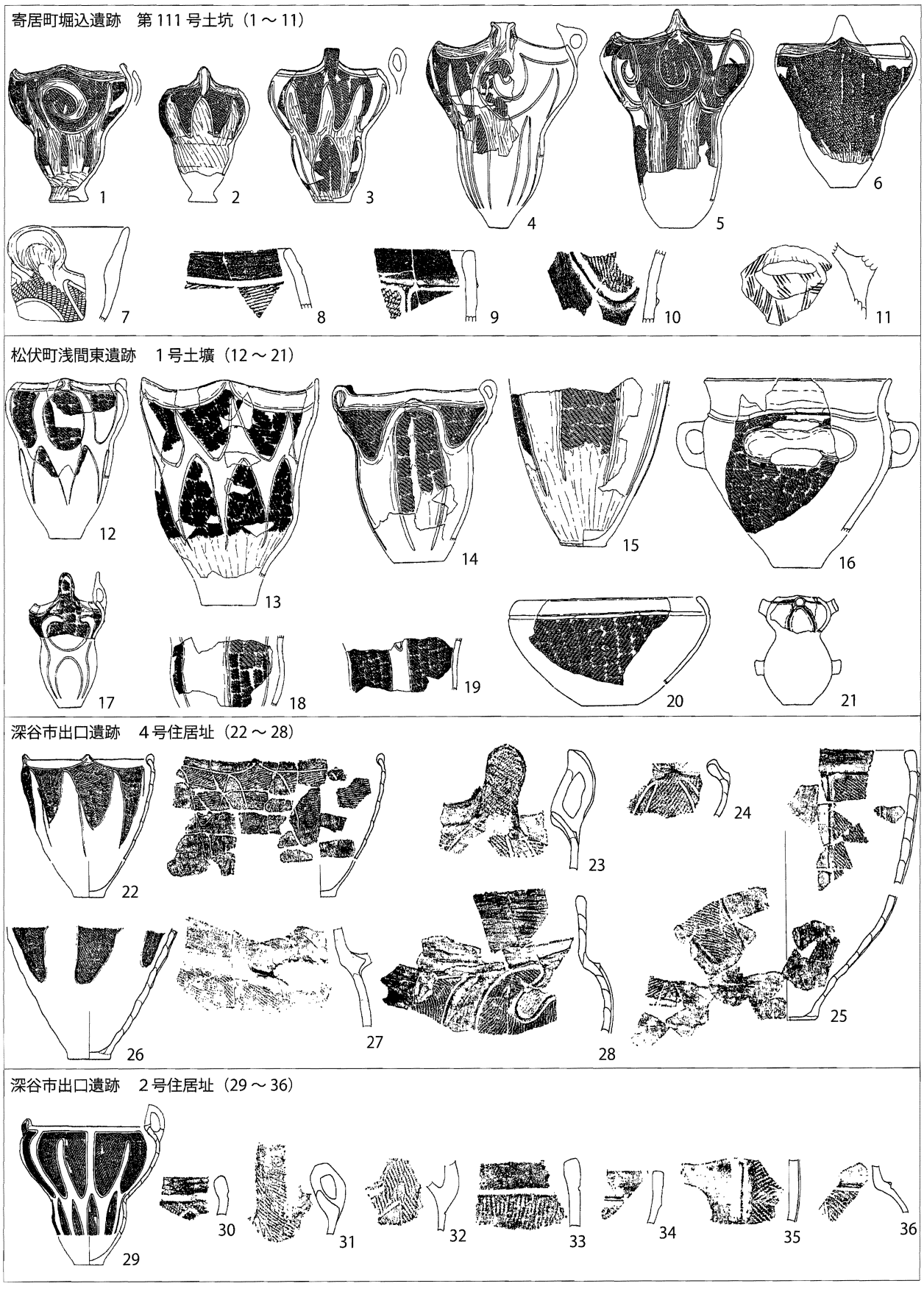
住居跡の形状は柄鏡形である。７は柄部の先端、８は主体部の出入口部の埋甕である。３は８の埋甕内から入れ子状に検出された。１は沈線文系土器で、口縁部の区画に微隆起線文を巡らし、微隆起線文に沿って上下両側に沈線文を添わせている。胴上部の文様は先端が渦巻くＪ字文が施文される。２は微隆起線文系土器で、岩坪類と考えられる。

上尾市宿北V遺跡第２号住居跡（第10図９～15）（上野1999）

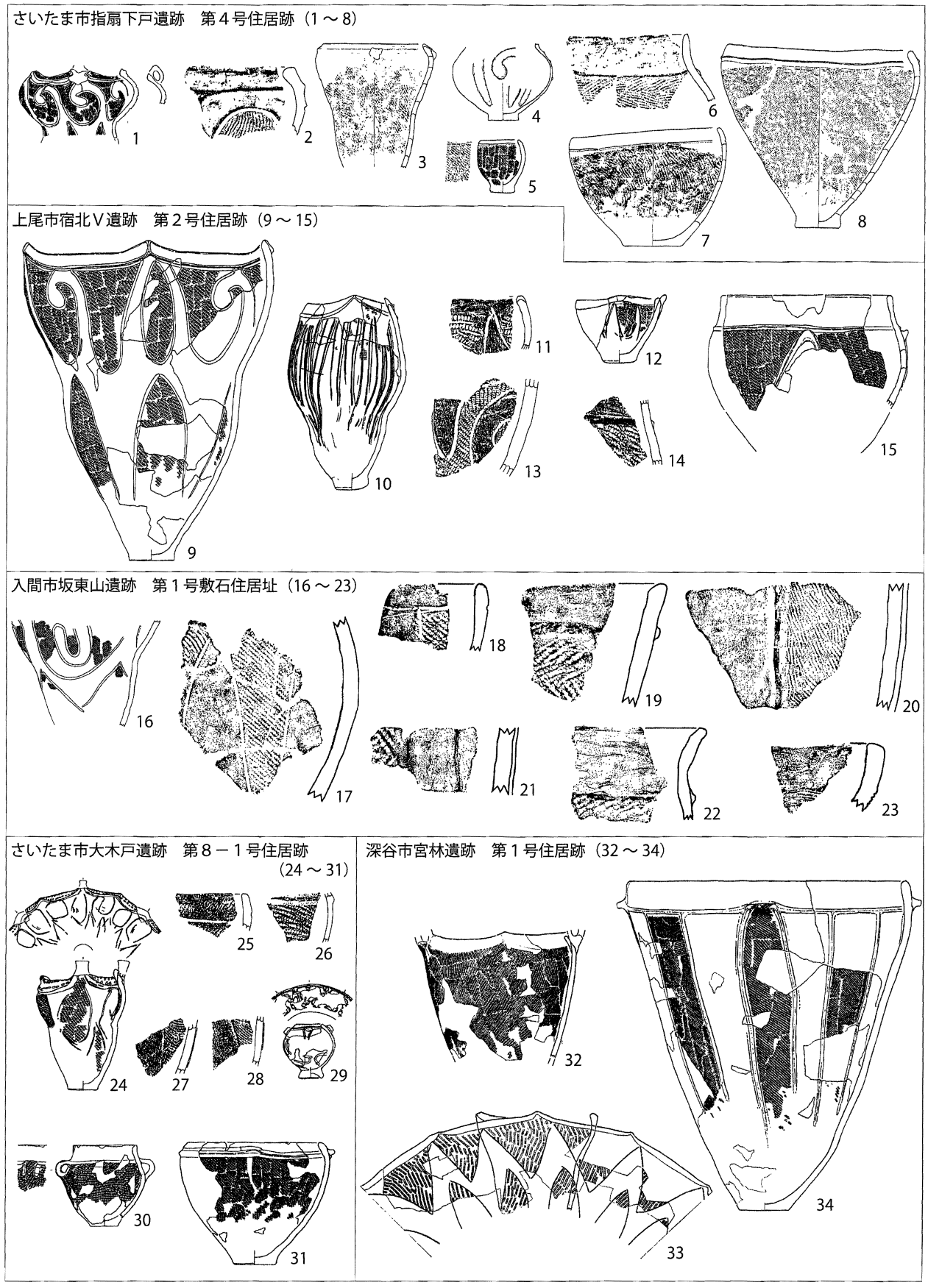
住居跡の形状は柄鏡形である。１は沈線文系土器で、上部の文様は先端が渦巻くＪ字状文とV字状文と楕円形状文が、４単位ずつ施文されている。胴下部の文様は８単位施文される。12は小型の浅鉢形の沈線文系土器で、沈線によって鋸歯状に文様が施文される。

入間市坂東山遺跡第１号敷石住居址（第10図16～23）（谷井1973）

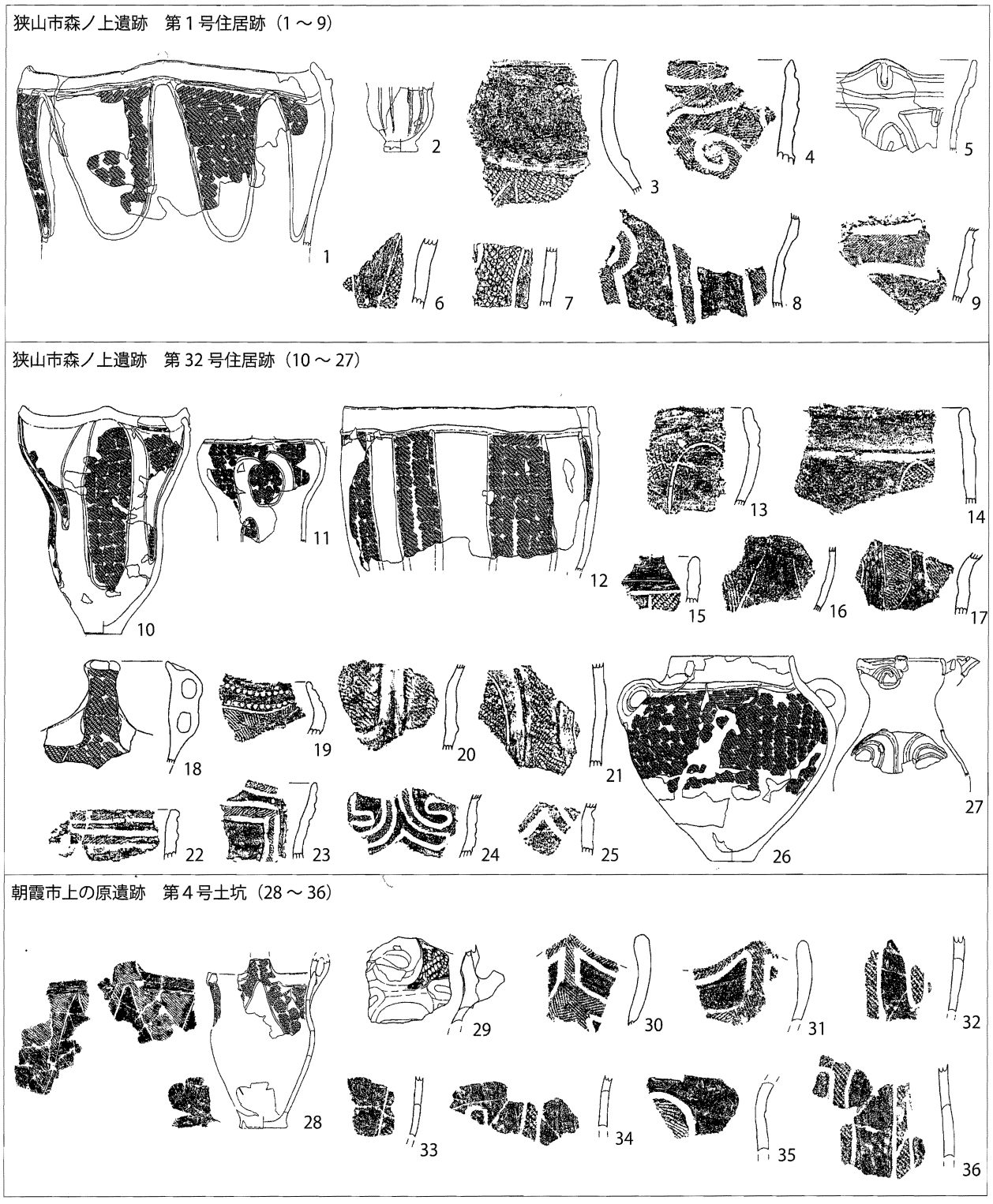
住居跡の形状は柄鏡形である。部分的に敷石が残存する敷石住居である。16は柄部に埋設された土器である。沈線文系土器で、胴上部の文様は先端が渦巻き状となるＪ字状文と考えられる。胴下部の文様は、逆V字状文の先端の角度が開いてお



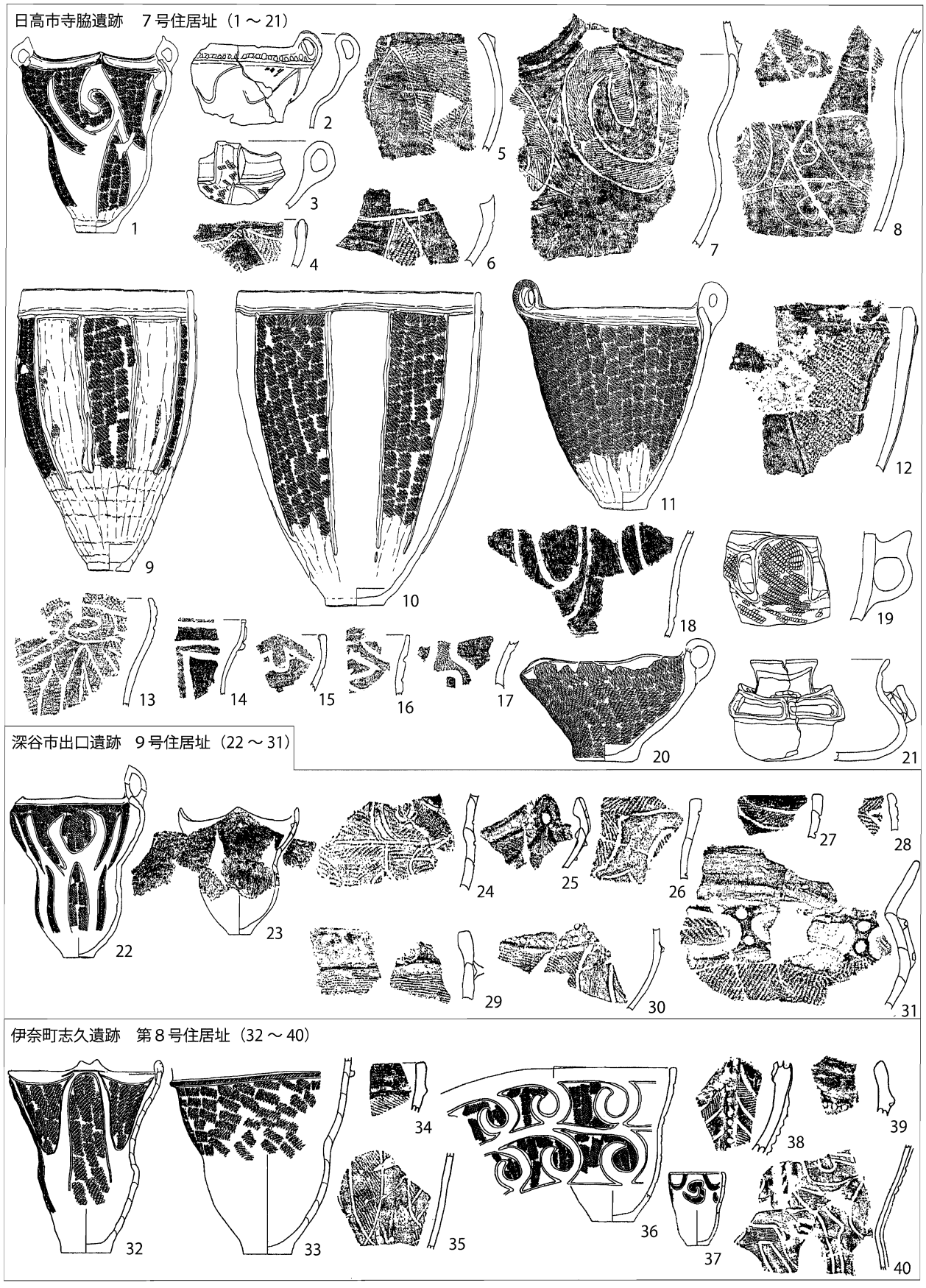
第9図　埼玉県出土の中期末から後期初頭の土器群（1）



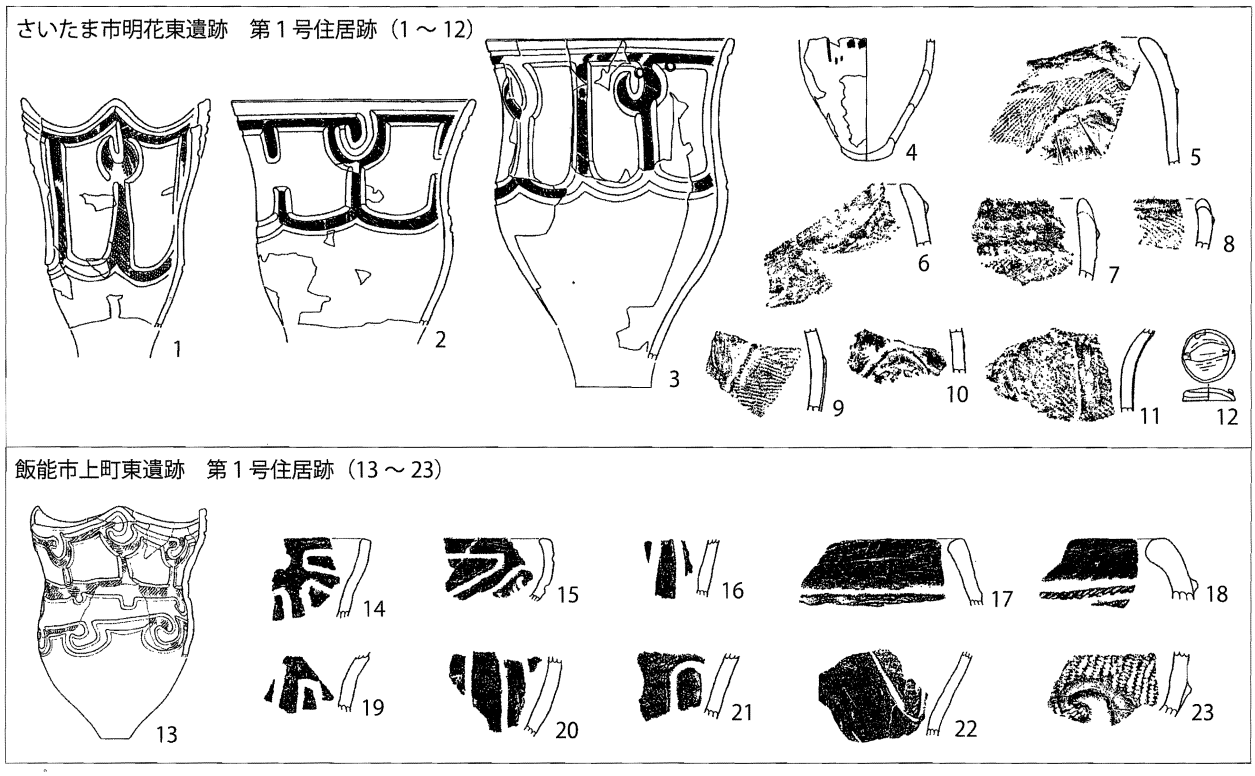
第10図　埼玉県出土の中期末から後期初頭の土器群（2）



第 11 図　埼玉県出土の後期初頭の土器群（１）



第12図　埼玉県出土の後期初頭の土器群（2）



第 13 図　埼玉県出土の後期初頭の土器群（３）

り、４単位が施文される。

さいたま市大木戸遺跡第８－１号住居跡（第10図24～31）（西井他2008）

住居跡の形状は柄鏡形である。24は埋甕である。沈線文系土器で、口縁部は有段状に盛り上がり、そこに２列の刺突文を巡らしている。胴部の上下の文様は、粗雑になっている。30は小型の両耳壺である。

深谷市宮林遺跡第１号住居跡（第10図32～34）（宮井他1985）

住居跡の形状は、住居跡の半分が検出されておらず不明である。33の吉井城山類の沈線文系土器は、上のＶ字状文と下の逆Ｖ字状文が入れ子状に施文される。34は微隆起線文系土器で、直線的な区画文と、楕円状の区画文が交互に施文される。楕円状の区画文は先端が、口縁部下の区画文を上に押し上げている。

加曽利Ｅ式土器と古い部分の称名寺式土器が共伴する遺構（第11～13図）

狭山市森ノ上遺跡第１号住居跡（第11図１～９）（石塚他2005）

住居跡は半分が調査区域外となるが、住居跡内には敷石が残存していることから、柄鏡形の敷石住居と考えられる。４・５・８・９の第１段階と考えられる称名寺式土器が共伴する。１は微隆起線文系土器である。U字状文が単位文として施文される。称名寺式土器は破片のみが出土しており、加曽利Ｅ式土器が主体と考えられる。

狭山市森ノ上遺跡第32号住居跡（第11図10～27）

住居跡の形状は柄鏡形である。床面には小礫が分布している。22～25などの第１段階の称名寺式土器が共伴する。10は柄部先端の埋甕で、26は主体部の出入口部の埋甕である。10の胴部文様は岩坪類に近いが、沈線によって文様が施文されている。11は沈線文系土器で、胴上部の文様は蟹鋏状となっている。称名寺式土器は破片のみが出土しているもので、加曽利Ｅ式土器主体の住居跡である。

朝霞市上の原遺跡第４号土坑（第11図28～36）（照

林他2008)

土坑の形状は不整形である。30〜32、34〜36の第１から２段階の称名寺式土器が共伴している。28・29、33は加曽利Ｅ式土器である。沈線文系土器の28は胴上部の文様がV字状に施文される。

日高市寺脇遺跡７号住居址（第12図１〜21）（松本他2006）

住居跡の形状は柄鏡形である。敷石が残存しており、敷石住居である。13〜18などの第１段階の称名寺式土器が共伴する。９は柄部先端、11は主体部の出入口部の埋甕である。９の下からは、15の称名寺式土器の破片が検出されている。1〜７は沈線文系土器である。１の胴上部の文様は、Ｊ字文とV字文を交互に施文している。V字文の先端は閉じられていない。称名寺式土器は破片のみ出土しており、加曽利Ｅ式土器主体の住居跡と考えられる。

深谷市出口遺跡９号住居址（第12図22〜31）（笹森1977）

26〜28、30などの第１から２段階の称名寺式土器が共伴している。沈線文系土器の22は、胴上部の文様が蟹鋏状となっている。称名寺式土器の出土は破片のみであり、加曽利Ｅ式土器主体の住居跡である。

伊奈町志久遺跡第８号住居址（第12図32〜40）（城近1976）

住居跡の形状は柄鏡形である。第３段階と考えられる36などの称名寺式土器が共伴している。32は主体部の出入口部、33は柄部先端の埋甕である。１は沈線文系の岩坪類の土器である。加曽利Ｅ式土器と称名寺式土器の出土量に大きな差はない。

さいたま市明花東遺跡第１号住居跡（第13図１〜12）（青木1994）

住居跡の形状は柄鏡形である。加曽利Ｅ式土器は、微隆起線文系土器の破片のみが検出されている。１〜３など、出土した称名寺式土器は、第２段階と考えられる。称名寺式土器主体の住居跡である。

飯能市上町東遺跡第１号住居跡（第13図13〜23）（渡辺他2006）

住居跡の形状は柄鏡形である。主体部と柄部の一部に敷石が残存する敷石住居である。13は炉跡内から検出されたもので、第２段階の称名寺式土器である。加曽利Ｅ式土器は破片のみが出土している。住居跡は、称名寺式土器が主体である。

加曽利Ｅ式土器と中位の称名寺式土器が共伴する遺構（第17図）

北本市市場Ⅰ遺跡１号住居跡（第17図１〜11）（磯野1997）

住居跡の形状は柄鏡形である。４〜11などの第４段階の称名寺式土器が出土している。１は加曽利Ｅ系の土器で、胴部には微隆起線文でX字状に施文している。２は関沢類型の土器である。称名寺式土器主体の住居跡である。

（５）群馬県（第14・15・17図）

称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式主体の遺構（第14図）

前橋市荒砥北原遺跡６号住居址（第14図１〜６）（石坂1986）

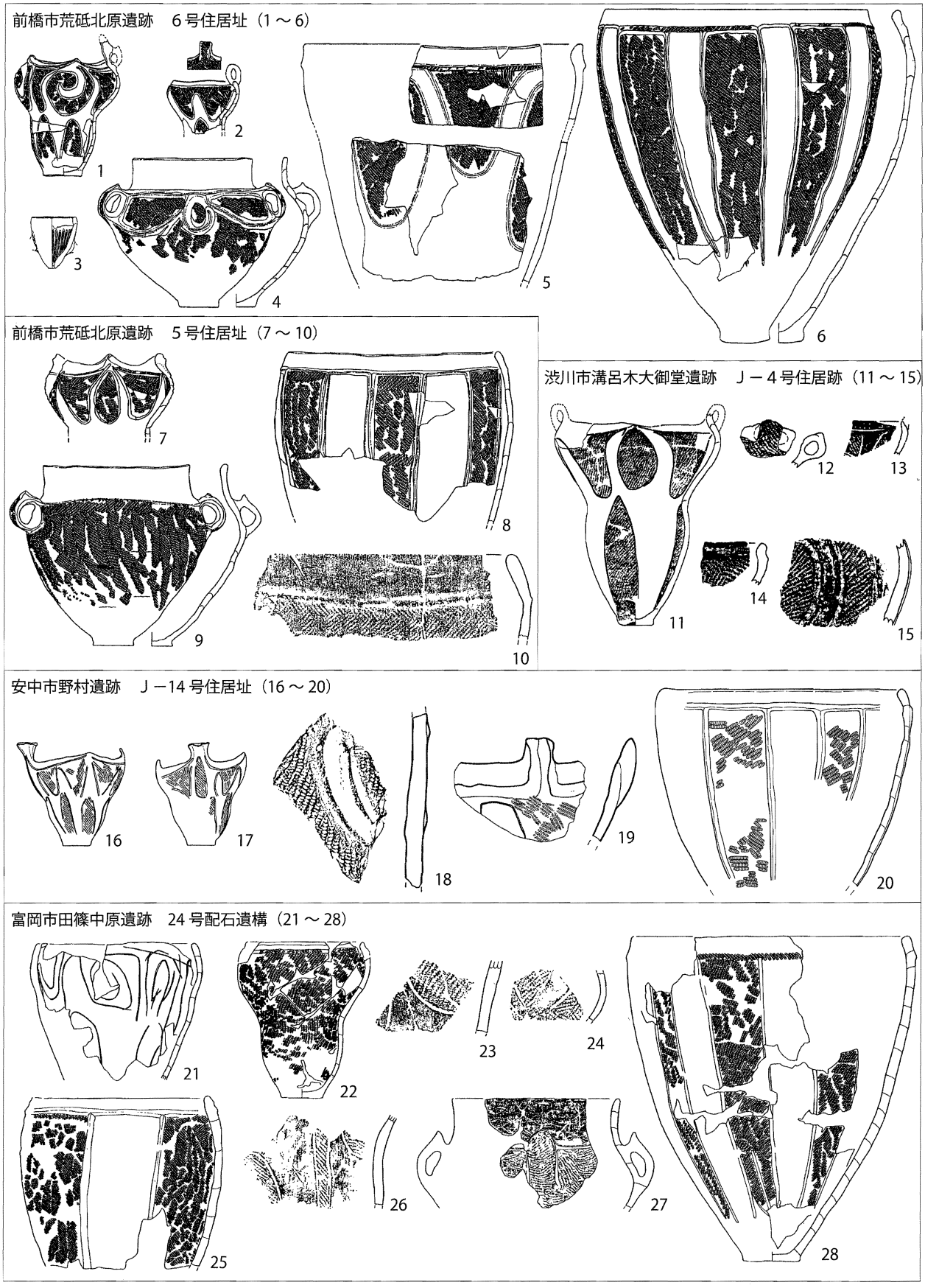
住居跡の形状は不整円形である。６は炉跡に埋設した土器である。１・２は沈線文系土器で、他は微隆起線文系土器である。１の胴上部の文様は単位文化している。２の胴上部の文様は波状のままで単位文化はされていない。

前橋市荒砥北原遺跡５号住居址（第14図７〜10）（石坂1986）

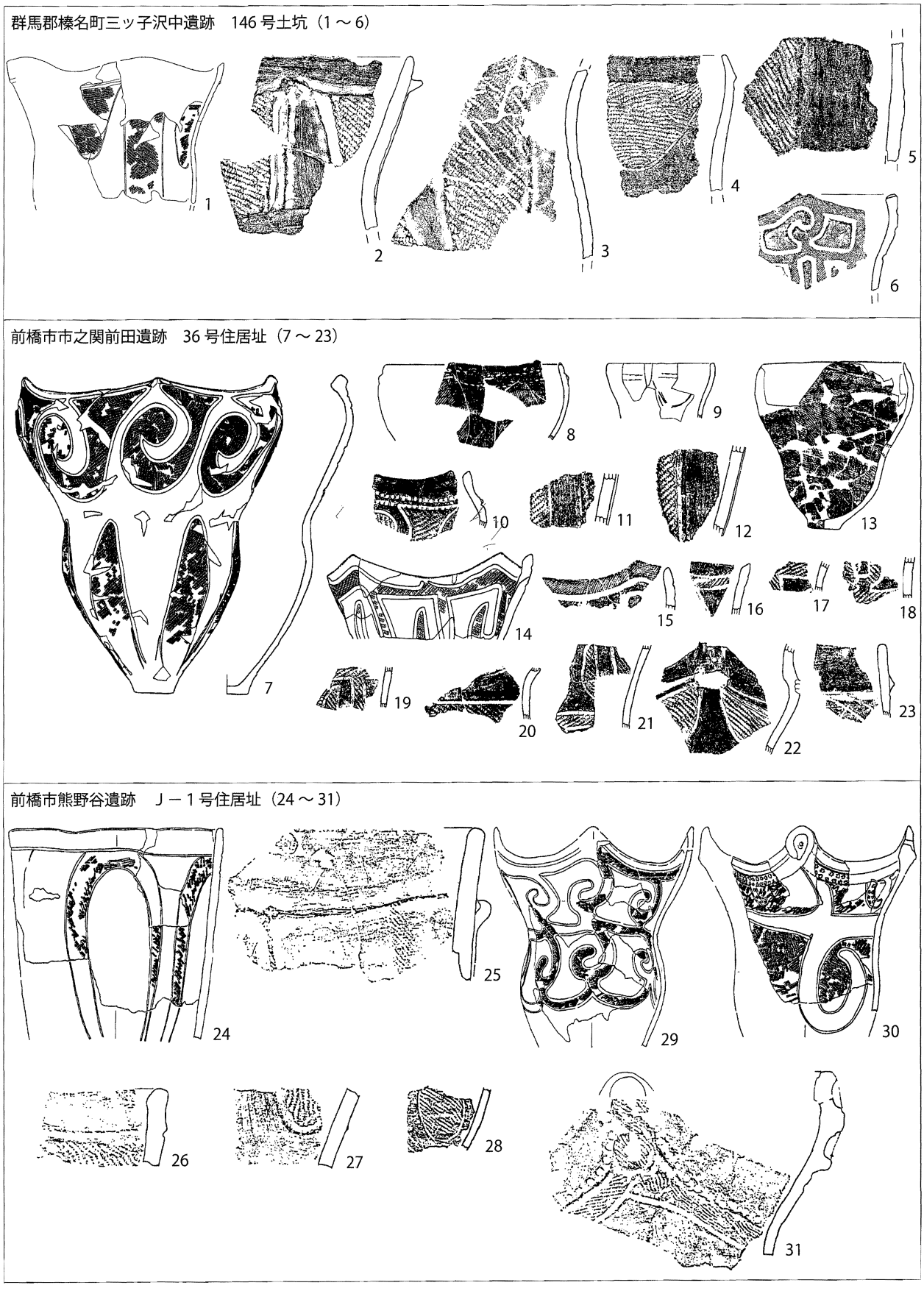
住居跡の形状は円形である。７の沈線文系土器は、胴上部の文様が単位文化している。９は両耳壺である。

渋川市溝呂木大御堂遺跡Ｊ－４号住居跡（第14図11〜15）（小林他2003）

住居跡の形状は柄鏡形である。11は沈線文系

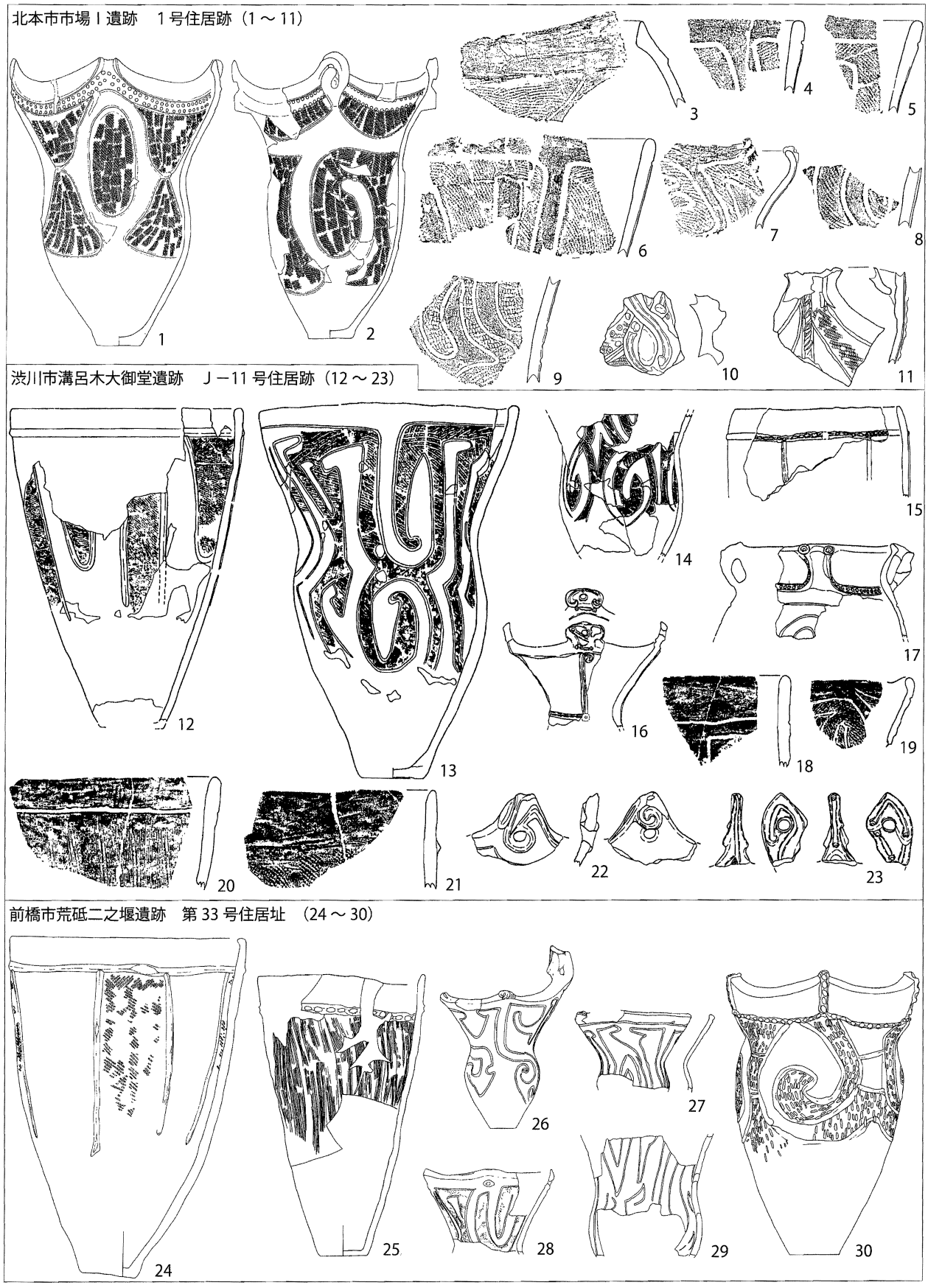


第14図　群馬県出土の中期末から後期初頭の土器群



第15図　群馬県出土の後期初頭の土器群

第16図　神奈川県・東京都出土の後期初頭の土器群



第17図　埼玉県・群馬県出土の後期初頭の土器群

土器で、胴上部は玉抱文となるが、玉抱文の上部は、口縁部の区画を口唇側に迫り上げるように施文されている。

安中市野村遺跡Ｊ－14号住居址（第14図16～20）（千田他2003）

住居跡の一部に敷石が残存しており、敷石住居と考えられる。16・17は小型の深鉢形土器で、吉井城山類の沈線文系土器である。

富岡市田篠中原遺跡24号配石遺構（第14図21～28）（菊池他1990）

住居跡の形状は柄鏡形である。住居跡には敷石が残存しており、敷石住居である。21は沈線文系土器で、胴部の上下に分かれる文様は崩れている。

加曽利Ｅ式土器と古い部分の称名寺式土器が共伴する遺構（第15図）

榛名町三ツ子沢中遺跡146号土坑（第15図１～６）（池田2000）

土坑の平面形状は円形である。第１から２段階の称名寺式土器である６が共伴している。１・４は沈線文系土器である。２・３、５は微隆起線文系土器である。称名寺式土器は破片のみで、住居跡は加曽利Ｅ式土器が主体を占めている。

前橋市市之関前田遺跡36号住居址（第15図７～23）（小川1992）

住居跡の形状は柄鏡形である。敷石が残存するもので、敷石住居である。14～21などの第２段階の称名寺式土器が共伴する。７は柄部先端、13は主体部の出入口部分の埋甕である。７は沈線文系土器で、先端が渦巻く単位文化したＪ字文を施文している。11・12は微隆起線文系の深鉢形土器である。称名寺式土器は破片であることから、住居跡は加曽利Ｅ式が主体と考えられる。

前橋市熊野谷遺跡Ｊ－１号住居址（第15図24～31）（前原1989）

第３段階の29の称名寺式土器が共伴する。24～28は加曽利Ｅ式土器である。24はバケツ状の器形の深鉢である。沈線によって逆U字文を施文している。30・31は関沢類型である。

加曽利Ｅ式土器と中位以降の称名寺式土器が共伴する遺構（第17図）

渋川市溝呂木大御堂遺跡Ｊ－11号住居跡（第17図12～23）（小林他2003）

住居跡の形状は柄鏡形である。第５段階の称名寺式土器が検出されている。12は加曽利Ｅ系の深鉢形土器で、微隆起線文で直線的なモチーフとU字文が交互に施文されている。

前橋市荒砥二之堰遺跡第33号住居址（第17図24～30）（徳江1985）

住居跡の形状は柄鏡形である。主体部には小円礫による周礫が認められた。遺物の時期は、新しい部分（第６・７段階）にあたる。この時期にも24の加曽利Ｅ系の微隆起線文による深鉢形土器が残存している。24は完形品である。

５．加曽利Ｅ式土器の変遷（第18・19図）

前項において、各地域の加曽利ＥⅣ式土器以降の遺構一括土器について概観してきた。そこでそれらの資料をもとに、称名寺式土器との関係と、加曽利式土器の変遷について考えていきたい。

ここでは、第Ⅰ期から第Ⅴ期に分類し称名寺式土器との対応関係を含め変遷図を作成した。なお変遷図の各期内における土器の並びは、絶対的な年代順ではなくおおまかな土器の変化を追っているものである。なお、表中の土器に付けられた番号は、図版（第＊図）と図版内の番号を組み合わせたものである。

第Ⅰ期（第18図）

第Ⅰ期としたものは、称名寺式土器を伴わない土器群で、第Ⅱ期以降の称名寺式土器を伴う土器群よりも古い様相を持つものである。

胴下部の文様が逆Ｖ字状、鋸歯状に変化した吉

井城山類系統の沈線文系土器は、胴上部の文様の波状文が単位文化する傾向にある。しかしながら、４－１、９－13のように波状に施文されるものも残存している。また文様の単位数が、Ⅱ期と比較し多単位となっている。また、この吉井城山類の胴上部の文様が単位文化することにより、文様にバラエティーが見られるのも、第Ⅰ期からである。２－27、７－１など玉抱文を持つもの、7－6、10－１、14－1のように先端が渦巻くＪ字文、９－17のように蟹鋏状に施文されるものなどがある。また、これらの文様については、ＥⅢ段階で出現する９－５の梶山類との関連性が考えられる。吉井城山類の器形については、胴部の括れが強いのが特徴である。沈線文系土器は他に、２－５のように、１段化した懸垂文系の土器も存在しているが、磨消部分の幅は狭いものとなっている。

微隆起線文系土器は、４－５の梶山類の他、７－7、４－２などの岩坪類、9－15、14－8などの懸垂文を直線的に施文するものがある。懸垂文の単位は、第Ⅱ期と比較すると施文の幅が狭く、多単位となっている。また７－２や14－５のように、吉井城山類のモチーフを持つものもある。

この時期の特徴としては他に14－４、14－9の両耳壺が挙げられる。また、瓢形の注口土器も出現している。

第Ⅱ期（18図）

第Ⅱ期としたものは、称名寺式土器の第１段階・第２段階に並行するものである。本来ならば、第１段階と第２段階を細別するべきだが、ここを明確に区分することは困難であった。また、加曽利Ｅ式土器の細別についても、同様の状況であったことから、ここでは第Ⅱ期として一括して扱うこととした。

第Ⅱ期については、称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式土器を出土する遺構も多い。そこで、称名寺式土器を伴う加曽利Ｅ式土器を抽出し、第Ⅰ期との差や一括土器との比較を行い、第Ⅱ期の加曽利Ｅ式土器として分類を行った。

第Ⅰ期からの変化については、吉井城山類の沈線文系土器では、胴上部文様の単位文化が進み、波状文構成がなくなることが挙げられる。胴下部の文様は大型化し、単位数が少なくなる傾向にある。この傾向は胴上部においても同様で、単位文間の無文部の間隔が広くなるものも多い。また、10－16や２－22など文様の崩れも見られる。同時に器形も胴部の括れが緩やかになり、寸胴状になるものも多い。他にこの時期の大きな特徴としては、10－９や15－７のように沈線文系土器についても器形の大型化がみられることである。

沈線文系土器については、３－17や、５－１のように鋸歯状の文様が、一帯化して上部のみに施文されるものも見られる。

微隆起線文系土器では、梶山類は見られなくなっている。８－２・９・24に見られるように岩坪類は、４単位の波状構成が多く、胴部文様も口縁部の波頂部に合わせて施文されている。口縁部から直線的な懸垂文を施文する土器は、５－６、12－９の様に長胴化するものが多い。また、懸垂文の施文幅が広くなり、単位数も少なくなる傾向にある。

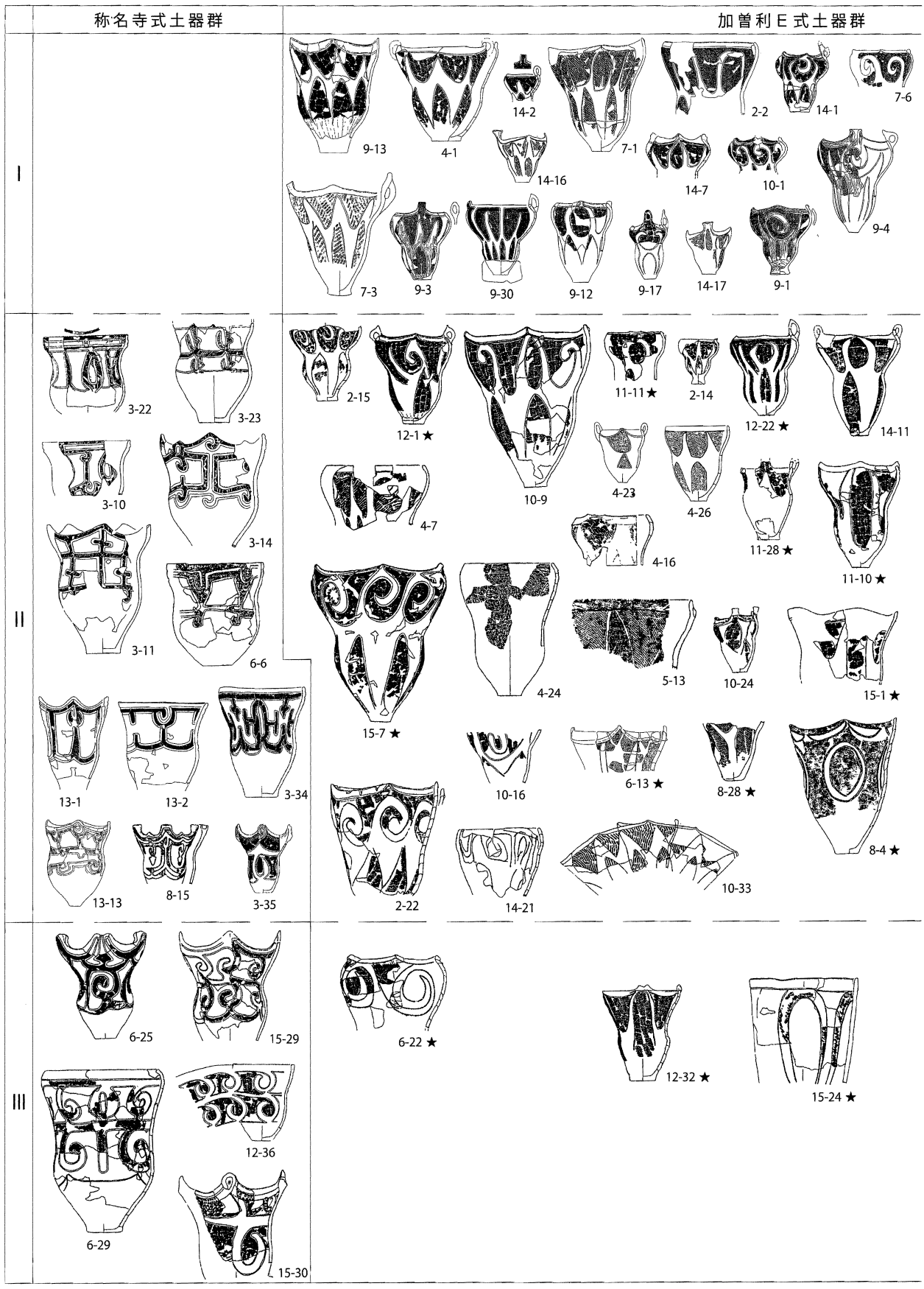
両耳壺についても、２－18、８－８のように長胴化する傾向が見られる。

他にも第５図９や、第12図20に見られる小型の片口注口土器や、瓢形の注口土器、土製の蓋などが見られ、第Ⅱ期が、さまざまな器形の土器で組成されていることがわかる。

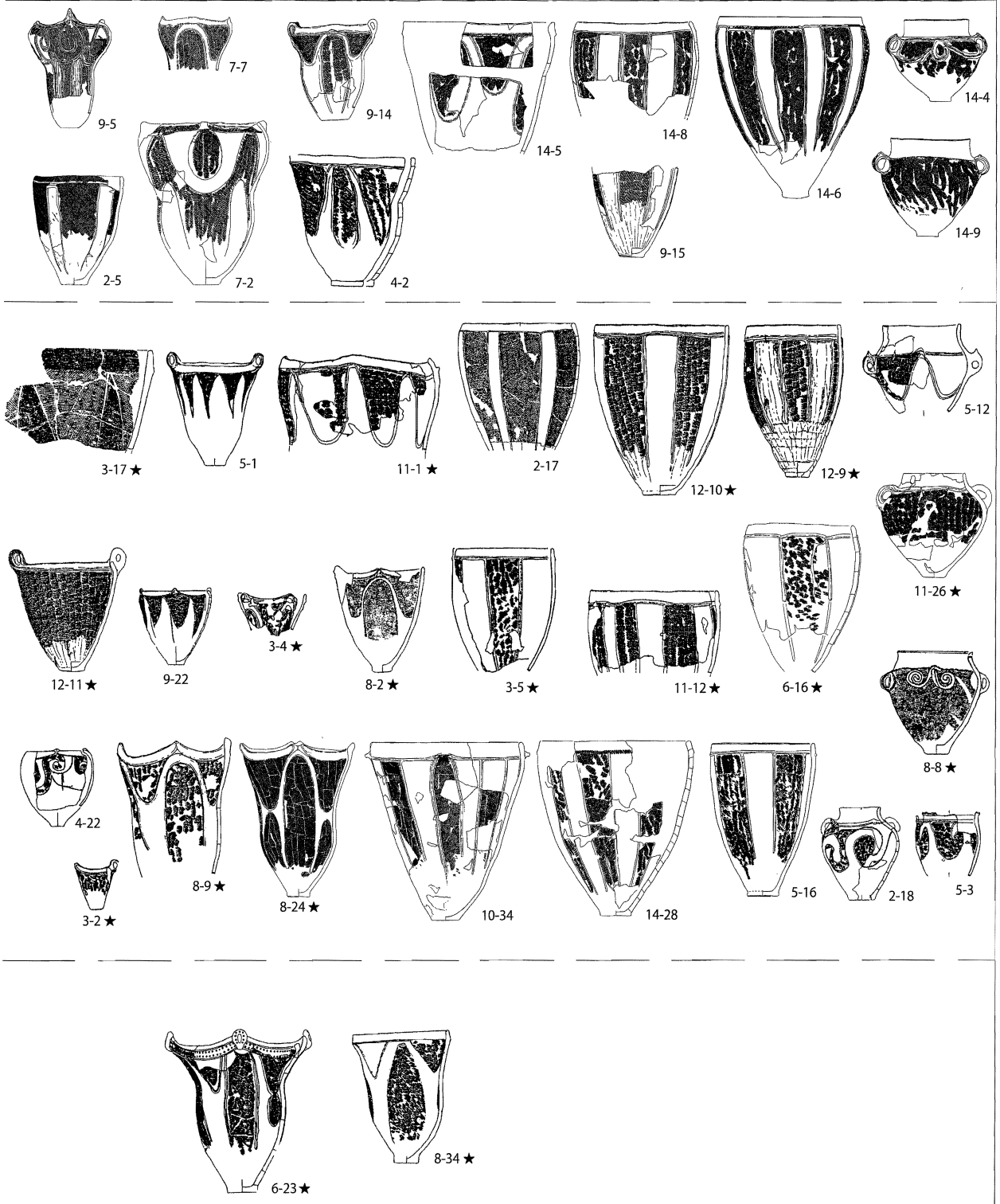
第Ⅲ期（第18図）

称名寺式土器の第３段階に並行する段階である。この段階になると、加曽利Ｅ式土器のみで構成される遺構は調べた限りでは存在しなかった。

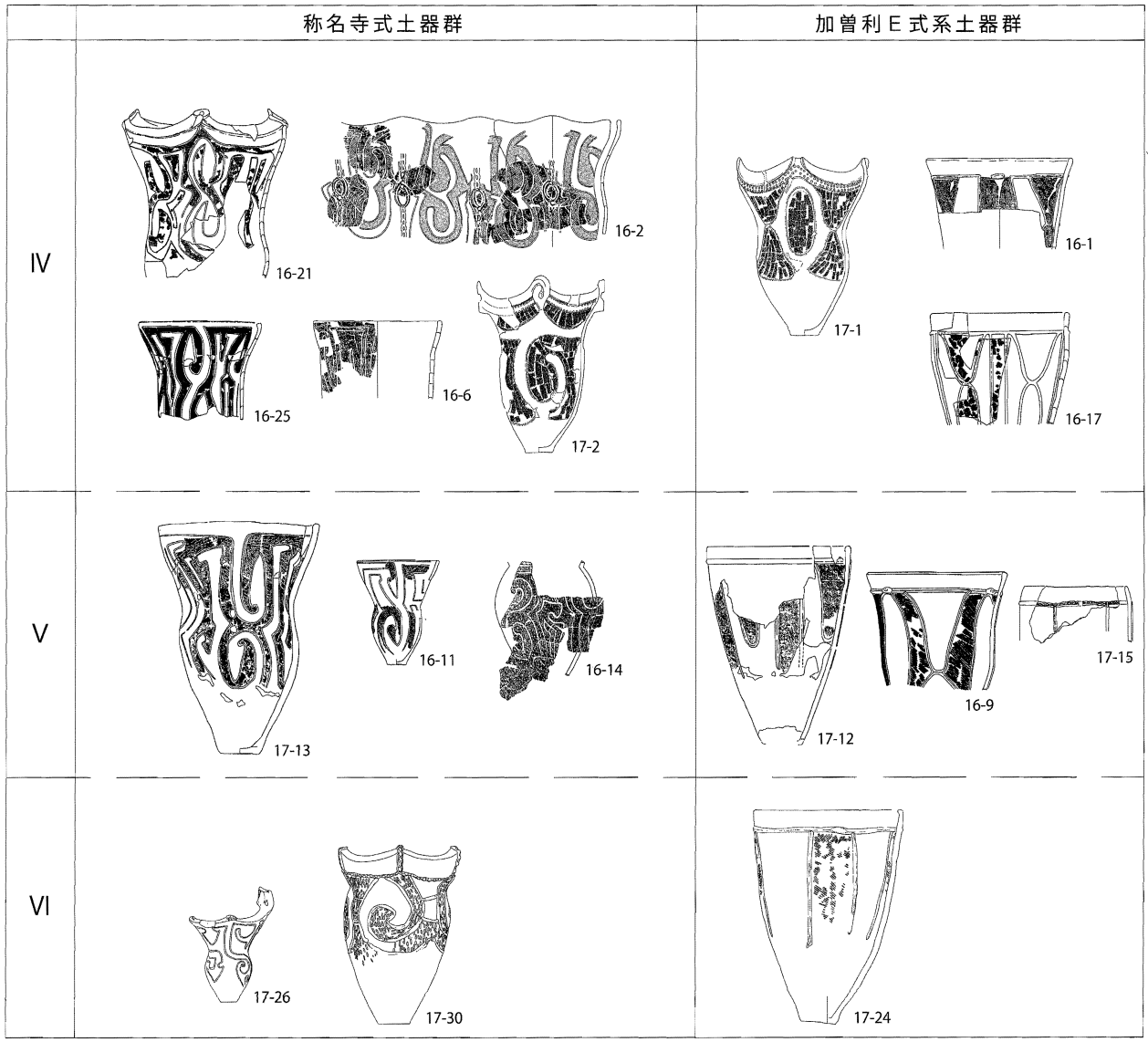
吉井城山類の沈線文系土器はほとんど検出されなくなり、検出されたものも６－22のように文様



第18図　中期末から後期初頭の土器変遷


9-5
7-7
9-14
14-5
14-8
14-6
14-4
14-9
2-5
7-2
4-2
9-15
3-17★
5-1
11-1★
2-17
12-10★
12-9★
5-12
11-26★
12-11★
9-22
3-4★
8-2★
3-5★
11-12★
6-16★
8-8★
4-22
3-2★
8-9★
8-24★
10-34
14-28
5-16
2-18
5-3
6-23★
8-34★

★は称名寺式土器と共伴



第19図　後期初頭の土器変遷

のモチーフが崩れている。他の沈線文系土器は、12－32の岩坪類の沈線文化したものや、15－24のバケツ状の器形を呈するものなどがある。

微隆起線文系土器は、6－23、8－34の岩坪類が挙げられる。第II期に比較すると、単位文間の間隔がさらに広くなる傾向がある。

第III期では、土器のバリエーションが激減していることが指摘される。

第IV期（第19図）

第4段階の称名寺式土器に並行する段階である。第IV期以降は、加曽利E式土器の沈線文系土器は検出されなくなる。沈線文系土器は、称名寺式土器に集約され、加曽利E式土器は微隆起線文系土器のみが検出される。17－1に見られる岩坪類の土器のX字文が、16－1、16－17などにも施文されている。

第V期（第19図）

第5段階の称名寺式土器に並行する段階である。この段階になると、加曽利E式系土器は微隆起線文系土器に、一定の位置が与えられているようである。文様は第4期同様に、X字文などが施文されている。

第Ⅵ期（第19図）

第６・７段階の称名寺式土器の新しい部分に並行する段階である。この段階でも、加曽利Ｅ式系の土器は残存しており、17－24にみられるように、第Ⅴ期同様、微隆起線文系土器が検出されている。

以上、第Ⅰ期から第Ⅴ期まで、各期の特徴や分類の基準について触れてきた。最後に各段階の位置付けについて、改めて触れて置きたい。

まず第Ⅰ期の位置付けについては、吉井城山類の胴下部文様が逆Ｖ字状、鋸歯状に変化する段階にあたり、従来の加曽利ＥⅣ式段階に相当する。この加曽利ＥⅣ式については、筆者は加曽利ＥⅣ式の宿北Ⅴ遺跡第２号住居跡出土土器の位置付けについて触れたことがある（上野1999）。当時は、今回対象とした吉井城山類の文様が逆Ｖ字状や、鋸歯状に変化したもの以降をＥⅣ式とし、称名寺式Ⅰａ式に並行させて考えていた。それからすれば第Ⅰ期以降が、称名寺Ⅰａ式に並行することになる。

しかしながら、その後、該期の遺構一括出土例が増加し、この段階については、さまざまな検討がなされてきた（金子2004、細田2008など）。

今回改めて資料を検討したところ、称名寺Ⅰａ式と並行する加曽利ＥⅣ式土器（第18図）より、明らかに古い様相を持つ土器群の存在が確認でき、第Ⅰ期として設定することとした。このことから第Ⅰ期については、第Ⅱ期の称名寺式土器を伴う段階より古い土器群ということで、称名寺Ⅰａ・Ⅰｂ式を伴う第Ⅱ期も加曽利ＥⅣ式の範囲内であるとすれば、第Ⅰ期はＥⅣ式古段階ということができる。

第Ⅱ期については、明らかに後期称名寺式土器が並行している段階で、称名寺式土器からすれば第１段階、第２段階となる。加曽利Ｅ式については、第Ⅰ期を加曽利ＥⅣ式古段階とし、第Ⅲ期までを加曽利ＥⅣ式の範疇とするならば、第Ⅱ期は加曽利ＥⅣ式中段階ということになる。鈴木氏は第20回縄文セミナーにおいて、後期段階の加曽利Ｅ式土器について、混乱を避けるためにも「加曽利ＥＶ式」と呼ぶことが適切だとしており、それからすれば、第Ⅱ期の加曽利Ｅ式は加曽利ＥＶ式ということになる。

しかしながら、称名寺式土器を伴わない加曽利Ｅ式の遺構の土器群については、中期と後期との分類が困難な場合が多いと考えられ、第Ⅰ期と第Ⅱ期を明確に区分するには課題が多く残っている。

第Ⅲ期については、称名寺式からすれば第３段階となる段階である。この段階では、加曽利Ｅ式のみで構成される遺構は検出されなくなっている。この段階については、第Ⅱ期の後期加曽利Ｅ式土器をＥＶ式とするならば、ＥＶ式新段階と呼ぶのがふさわしいのではなかろうか。また、加曽利ＥⅣ式の範疇で捉えるならば、ＥⅣ式新段階となる。

第Ⅳ期以降は、称名寺式土器が主体となり、加曽利Ｅ式系の土器は、変化の乏しい微隆起線文系土器が継承しており、称名寺式土器組成の一類型と化しているものと判断される。第Ⅳ期が称名寺式土器の第４段階、第Ⅴ期が第５段階、第Ⅵ期が第６段階以降に相当する。従って、第Ⅳ期から第Ⅵ期の加曽利Ｅ式系土器についても、ＥＶ式と呼称するかどうかは疑問が残る。

６．加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器

前項では第Ⅰ期から第Ⅵ期までの、加曽利Ｅ式土器と共伴する称名寺式の変遷と、その段階について検討した。ここではそれらをもとに、加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器との関係性について考えてみたい。

第18図からすれば、加曽利Ｅ式土器が少なくとも、第Ⅰ期・第Ⅱ期、つまり称名寺式土器の第２段階までは土器の器種や、施文される文様のバリエーションも多彩であることは一目瞭然である。

称名寺式土器の出現をまったく考慮しなければ、

第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期の枠組みをはずし、それらの土器群の変化の中で、加曽利ＥⅣ式土器としての細分が可能であったと考えられる。

後期は称名寺式土器から始まるとされ、中期の加曽利Ｅ式土器は中期後葉から末葉の土器群と考えられていた。しかし、当初から後期にも加曽利Ｅ式と考えられる土器が残存することは知られており、そのためＥⅣ式については様々論じられてきた。その後、資料の増加により、前述したように、称名寺式土器の第１段階・第２段階の加曽利Ｅ式土器の在り方について、徐々に明らかになってきたと言える。つまり、加曽利式土器は後期初頭まで継続しており、称名寺式土器と並存する時期幅があったということである。

そのため、第Ⅱ期の段階では、同一地域においても加曽利Ｅ式主体の遺構、称名寺式主体の遺構が混在しているのである。加曽利Ｅ式主体の遺構においては、当然のことながら、まったく称名寺式土器が出土しない例もあり、それは称名寺式主体の遺構においても同様である。このこと自体が、加曽利Ｅ式の終末段階の土器を中期と捉えるか、後期と捉えるかについて困難にしている要因と思われる。

ところが、称名寺式土器の第３段階である第Ⅲ期になると、遺構は称名寺式土器を主体とするものへと変化してくる。加曽利Ｅ式土器のバリエーションも著しく少なくなり、沈線文系土器群も、吉井城山類の系列のものはほとんど見られなくなっている。微隆起線文系土器のみが残存する第Ⅳ期以降からすれば、この第Ⅲ期が、加曽利Ｅ式土器の終焉する段階と考えられるのではないだろうか。

そして第Ⅳ期の称名寺式土器の第４段階以降、つまり称名寺式土器の中位の段階以降は、第19図でも明らかなように、加曽利Ｅ式系土器群は微隆起線文系のみとなり、最終的には粗製化した大型の土器のみが残存する状況となっている。

第Ⅲ期ですでに始まっていたように、加曽利Ｅ式の沈線文系土器は、沈線で文様を施文する称名寺式土器と、役割を交代するようになったのではないだろうか。

微隆起線文系土器群については、微隆起線文の土器を持っていなかった称名寺式が、地文のみや無文であった粗製土器の一部として、微隆起線文系土器群を取り入れ、類型化していったと言えるのではないだろうか。そのため、称名寺式の新しい段階になっても、それらの土器が残存したと考えられるのである。

以上のことからしても、称名寺式に組み入れられたと考えられる微隆起線文系土器のみが残存する加曽利Ｅ式系土器について、加曽利ＥＶ式と呼称することについては違和感を覚える。

つまり、第Ⅲ期において型式としての加曽利Ｅ式の組成は終焉を迎え、第Ⅳ期以降において称名寺式土器の一類型として、加曽利Ｅ式系土器が継承されているものと考えられるのではないだろうか。

以上のことを簡単にまとめてみる。

① 加曽利Ｅ式土器と、称名寺式土器が並存する時期幅があるため、称名寺式土器の最古段階において、加曽利Ｅ式土器との関係性が混乱している。

② 称名寺式第３段階において、加曽利Ｅ式土器の組成状況からすれば、加曽利Ｅ式が終焉したと言える。

③ 称名寺式第４段階以降は、加曽利Ｅ式系土器は称名寺式土器の一類型として残存していく。

７．おわりに

前項まで、加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器の関係について、考察を加えてきた。

その結果からすれば、後期以降の加曽利Ｅ式土器を、仮に加曽利ＥＶ式と呼称するとしても、称名寺式土器の一類型化すると考えられる称名寺式中段階以降については、それを加曽利ＥＶ式と呼

称するのは違和感がある。加曽利Ｅ式系土器または、微隆起線文系土器などの呼称が、妥当ではないのだろうか。

また、称名寺式土器を考えなければ、加曽利ＥⅣ式が、加曽利Ｅ式土器の終末段階であり、その中で古新などの細分も可能であると言える。しかし、後期初頭以降を加曽利ＥＶ式とすると、並存する称名寺式土器の出現以降がＥＶ式となる。加曽利ＥⅣ式のどこからを後期初頭とするのかによっては、加曽利ＥⅣ式土器の枠組をどう捉えるか、また、直前の加曽利ＥⅢ式土器との関連も考えていく必要がある。加曽利ＥＶ式として呼称するか否かも含め、今後、大きな課題になってくると予想される。

最後になるが、中期末葉から後期初頭にかけては、急速に遺跡数が減少し、また集落における住居跡の軒数も激減する時期である。そのため、遺構数の減少と相まって資料数が少ない現状であると言える。ここでは、その限られた資料のうち、遺構の一括遺物を対象として、検討を加えてきた。今後、資料が増加すれば中期末葉から後期初頭の現状が先の課題も含め、さらに明らかにされていくと考えられる。

また、今回は茨城、栃木を、対象地域としなかった。今後は、これらの地域の検証も考えてきたい。また、各地域における加曽利Ｅ式土器の地域差についても考えていきたい課題である。

引用・参考文献

相原俊夫他　1993『羽沢大道遺跡』　県営羽沢団地内遺跡発掘調査団

青木義脩　1994『明花東遺跡発掘調査報告書』　浦和市遺跡調査会報告書　第181集

赤城高志　1992『調布市上布田遺跡』　調布市埋蔵文化財調査報告　23

井口直司他　1981『新山遺跡』　東久留米市埋蔵文化財調査報告書　第８集

池田政志　2000『三ツ子沢中遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第260集

石坂茂　1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂茂　1990「群馬県内の称名寺式土器」『縄文後期の諸問題』第４回縄文セミナー

石塚和則他　2005『森ノ上遺跡』　狭山市遺跡調査報告書　第14集

礒崎一　2006『堀込遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第330集

磯野治司　1997『市場Ⅰ遺跡』　第３次調査　北本市埋蔵文化財調査報告書　第５集

伊藤健他　2010『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡』　東京都埋蔵文化財センター調査報告　第239集

稲村晃嗣　1990「加曽利Ｅ系列の土器群」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター

今井康博　1990「調査研究集録第７冊」『勝田第６遺跡のＪ１号住居址出土遺物』　横浜市埋蔵文化財センター

今村啓爾　1977「称名寺式土器の研究（上）」『考古学雑誌』63－１

今村啓爾　1977「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』63－２

上野真由美　1999『宿北Ｖ遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第214集

上野真由美　2010「称名寺Ⅱ式土器について」『芙蓉峰の考古学』池上悟先生還暦記念論文集

大塚孝司他　1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小川卓也　1992『市之関前田遺跡Ⅲ』　群馬県勢多郡宮城村教育委員会

小田静夫他　1976『前原遺跡』（１）　前原遺跡調査会

加藤勝仁他　2000『川尻遺跡Ⅱ』　かながわ考古学財団調査報告　69

金子直行　2004『浅間東遺跡Ⅳ』　松伏町教育委員会　町内遺跡発掘調査報告書　第４集

上敷領久　2003『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅲ』　国分寺市調査会

菊池実他 1990『田篠中原遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書　第112集

喜多圭介　1989『長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書　第31集
久保田正寿　1985『裏宿遺跡』 青梅市遺跡調査会
小林修他　2003『溝呂木大御堂遺跡』 赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書　第21集
笹森健一　1977『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告　Ⅰ』 埼玉県遺跡発掘調査報告書　第12集
下津谷達男他　1977『中野木新山遺跡』 中野木新山遺跡調査団　(船橋市)
城近健一　1976『志久遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書　第31集
鈴木徳雄　1990「称名寺式土器」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター
鈴木徳雄　2007「称名寺式土器研究の諸問題」『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー
鈴木徳雄他　1990「称名寺・堀之内１式研究の諸問題－南関東の資料を中心として」『縄文後期の諸問題』第４回縄文セミナー
千田茂雄他　2003「野村遺跡」『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』群馬県安中市教育委員会
高橋健樹他　1997『寺原遺跡発掘調査報告書』 津久井町教育委員会
谷井彪　1973『坂東山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書　第２集
谷井彪・細田勝　1995「関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器」『日本考古学』第２号
谷藤保彦　2007「加曽利Ｅ式の系統を引く土器群」『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー
對比地秀行他　1992『弁財天池遺跡』 狛江市教育委員会
照林敏郎他　2008『上の原第五遺跡第１地点』 朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集
徳江秀夫　1985『荒砥二之堰遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
富樫雅彦他　1985『貫井二丁目遺跡』 練馬区遺跡調査会
長原亘　2000『千葉市愛生遺跡』 (財)千葉市文化財調査協会
中山俊之　2002『六崎貴船台遺跡（第10次)』 (財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書　第194集
西井幸雄他　2008『大木戸遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第355集
西井幸雄他　2010『上早見新田西遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第368集
西野雅人　2007『千葉東南部ニュータウン37』 千葉県教育財団調査報告書　第572集
花輪宏　1987『堀之内』 市川市教育委員会
早川泉　1985『清水が丘遺跡』 武蔵国府関連遺跡調査報告書
平子順一他　1992『稲ヶ原遺跡Ａ地点』 財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
細田勝　2008「加曽利Ｅ式土器」『総覧　縄文土器』
前原豊　1989『熊野谷遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
松本直也他　2006『寺脇』 日高市埋蔵文化財調査報告書　第32集
宮井英一他　1985『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第50集
山口泰行　1992『指扇下戸遺跡』 大宮遺跡調査会報告　第39集
山田光洋　2005『大高見遺跡　小高見遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書　38
山村貴輝　1980『井の頭池遺跡群Ａ地点発掘調査報告』 三鷹市埋蔵文化財報告　第５集
横倉要次　2004『松田古墳群』 茨城県教育財団文化財調査報告　第226集
横田正美　1983『餅ヶ崎遺跡』 貝塚博物館紀要　第９号　(千葉市)
渡辺清志他　2006『上町東／旭原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第324集
渡辺清志他　1998『宿東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第197集
渡辺務　1990「横浜市緑区松風台遺跡出土の称名寺式土器」『調査研究収録』第7冊　横浜市埋蔵文化財センター

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年３月14日　印　刷
平成23年３月24日　発　行

発　行　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台四丁目４番地１
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955

印　刷　株式会社文化新聞社